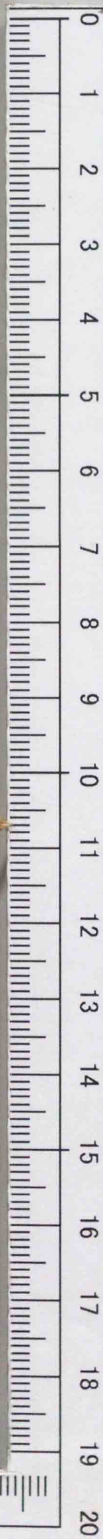


中等國語讀本

新修版

卷十

3759  
Oc8  
資料室



41633

教科書文庫

4  
810  
41-1926  
2000301573

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

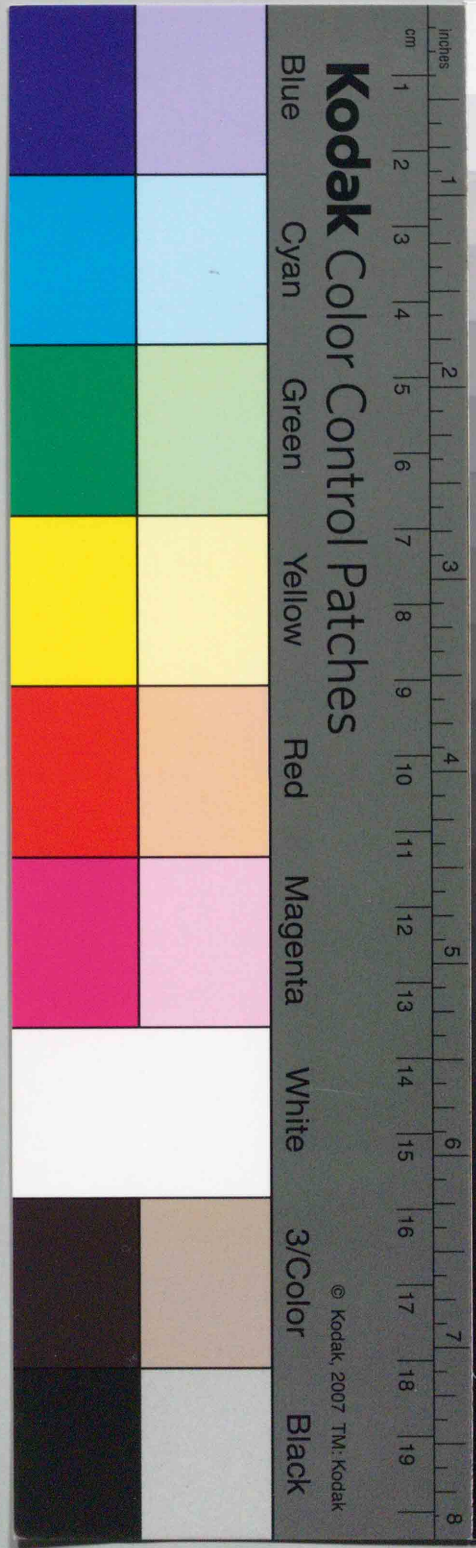


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



資料室

375.9

0c8

日七十月二年五十五大

濟定檢省部文

用科語國校學中

中等國語讀本

落合直文編  
金子元臣補

社會式株  
院書治明



# 目次

一 御即位禮祝語	……………	(官報)	一
二 大禮壽詞	……………	大隈重信	三
三 明治の文學	……………	佐佐政一	六
四 芭蕉の臨終	……………	相馬御風	一五
五 涙の味を知る人間の生活	……………	吉田絃二郎	三
六 いせの物がたり	……………	(伊勢物語)	一〇
一、東	下	……………	三〇
二、小野の御室	……………	……………	三三
三、さらぬ別	……………	……………	三五
七 幣のおひ風	……………	(土佐日記)	三七

一、口 網 ..... 三七

二、三笠山の月 ..... 三九

三、京 入 ..... 四一

八 古文學に現れた大和民族の根本性 ..... 五十 嵐 力 ..... 四四

九 鏡の影 ..... (大 鏡) ..... 五三

一、時平の救勸 ..... 五三

二、鶯宿梅 ..... 五四

三、けづり屑 ..... 五五

四、大堰川の三船 ..... 五九

一〇 詩聖杜甫 ..... 德富 蘇峰 ..... 六一

一一 朗詠數則 ..... (和漢朗詠集) ..... 六七

一二 法成寺 ..... (榮華物語) ..... 七七

一三 社會的意識 ..... 西田幾多郎 ..... 五五

一四 孔子とその徒 ..... 安藤 圓秀 ..... 六一

一五 わが國の繪畫 ..... 藤岡作太郎 ..... 六八

一六 羽 衣(謡曲) ..... 九五

一七 朝鮮の美術 ..... 柳 宗 悦 ..... 一〇一

一八 清文私評 ..... 金子 元臣 ..... 一〇六

一、春は曙 ..... 一〇八

二、過ぎにし方戀しさもの ..... 一一四

三、あてなるもの ..... 一二六

四、香爐峯の雪 ..... 一二八

一九 斷光錄 ..... 綱島 梁川 ..... 一三〇

一、苦痛の祕義 ..... 一三〇

二、自大自矜の一念を慎めよ……………二三

三、自然……………二三

二〇 御民われ(和歌)……………二五

二二 文學藝術の三作用……………坪内逍遙……………二〇

二三 大正の文學……………金子元臣……………二六

二三 靜觀と動觀……………大島正徳……………二四

附 錄

日本畫家一覽

(終)



中等國語讀本 新修一版 卷十

一 御即位禮敕語

朕祖宗ノ遺烈ヲ承ケ惟神ノ寶祚ヲ踐ミ爰ニ即位ノ禮ヲ行ヒ普ク爾臣民ニ誥ク

朕惟フニ皇祖皇宗國ヲ肇メ基ヲ建テ列聖統ヲ紹キ裕ヲ垂レ天壤無窮ノ神敕ニ依リテ萬世一系ノ帝位ヲ傳ヘ神器ヲ奉シテ八洲ニ臨ミ皇化ヲ宣ヘテ蒼生ヲ撫ス爾臣民世世相繼キ忠實公ニ奉ス義ハ則チ君臣ニシテ情ハ猶ホ父子ノコトク以テ萬邦無比ノ國體ヲ成セリ

皇考維新ノ盛運ヲ啓キ開國ノ宏謨ヲ定メ祖訓ヲ紹述シテ不磨

ノ大典ヲ布キ皇圖ヲ恢弘シテ曠古ノ偉業ヲ樹ツ聖德四表ニ光被シ仁澤遐邇ニ霑洽ス

朕今丕績ヲ繼キ遺範ニ遵ヒ内ハ邦基ヲ固クシテ永ク磐石ノ安

ヲ圖リ外ハ國交

ヲ敦クシテ共ニ

和平ノ慶ニ賴ラ

ムトス朕カ祖宗

ニ負フ所極メテ

重シ祖宗ノ神靈

照鑑上ニ在リ朕

夙夜兢業天職ヲ全クセンコトヲ期ス朕ハ爾臣民ノ忠誠其ノ分ヲ守リ勵精其ノ業ニ從ヒ以テ皇運ヲ扶翼スルコトヲ知ル庶幾クハ心ヲ同クシ力ヲ戮セ倍國光ヲ顯揚セムコトヲ爾臣民其レ克ク朕

終始一誠意

今上陛下御親書ヲ賜テ余也

皇德二十二年三月廿九日

今上陛下御親書ヲ賜テ余也

照鑑上ニ在リ朕

カ意ヲ體セヨ (官報)

## 二 大禮壽詞

臣重信謹ミテ言ス伏シテ以ミルニ

陛下萬世一系ノ寶祚ヲ踐ミ乾綱ヲ攬リテ坤維ヲ總ヘ爰ニ天津

高御座ニ昇御シ即位ノ大禮ヲ行ヒ給フ遠邇瞻仰シ億兆抃舞ス臣

重信誠懽誠喜頓首頓首

伏シテ惟ミルニ

皇祖天壤無窮ノ神敕ヲ皇孫ニ錫ヒテ八洲ニ君臨セシメ三種ノ

神器ヲ親授シテ五部ノ神ヲ臣事セシメ給フ萬世不易ノ皇基

確然トシテ爰ニ定マル

皇宗英武聖明

皇祖授國ノ宸意ヲ體シ天業ヲ恢弘セムトシ皇師ヲ帥キテ中洲

五部の神  
天兒屋根命、  
太玉命、天鈿  
女命、石凝姥  
命、玉祖命。

ヲ平定シ、皇位ニ即キテ萬機ヲ親裁シ、大ニ經綸ヲ行ヒ、洪範ヲ  
 後聖ニ貽シ給フ。而シテ 皇孫ニ奉事セシ諸部ノ子孫、亦咸先志ヲ  
 繼キテ皇謨ヲ翼贊ス。億載一統ノ皇業、蔚爾トシテ維レ崇シ。  
 先帝登極ノ初、復古ノ廟策ヲ定メテ、維新ノ皇圖ヲ啓キ、開國ノ鴻猷  
 ヲ宣ヘテ萬邦ノ善長ヲ採リ、藩封ノ舊制ヲ廢シテ一途ノ治化ヲ施  
 シ、不磨ノ大典ヲ布キテ立憲ノ政、揆ヲ明ニシ、兵制ヲ建定シテ陸海  
 ノ戎備ヲ嚴整シ、文教ヲ闡敷シテ黎元ノ智德ヲ啓養シ、産業ヲ殖興  
 シテ厚生ノ道ヲ擴メ、制度ヲ釐革シテ庶政ノ規ヲ宏ニシ給フ。是ニ  
 於テ乎、國家ノ綱紀廓如トシテ光張シ、邦運ノ旺盛駸駸トシテ止マ  
 ス。

陛下 大統ヲ承ケ、懿績ヲ續キ給ヒ、  
 皇祖 皇宗暨 列聖ノ宏謨ニ遵ヒ、丕基ヲ鞏固ニシ、德光ヲ宣揚シ  
 テ天職ヲ全クセムトシ、宵衣旰食 聖衷ヲ勞シ給フ。今大禮ノ吉辰

ニ方リ、明詔ヲ下シテ肇國ノ大本ヲ申明シ、臣子ノ恆道ヲ提誨シ給  
 フ。臣等感激已ム無シ。

伏シテ見ミルニ、



大隈重信

陛下仁孝恭儉ノ天資ヲ以テ、至隆  
 ノ治ヲ圖リ給フ。

皇祖 皇宗暨 列聖ノ神祐、

陛下ノ聖躬ニ在リ、皇業愈昌ニシ  
 テ德澤益浹ク、頌音四海ニ洋溢セ  
 ム。臣等夙夜勤勉、力ヲ戮セ、心ヲ同

クシ、忠盡ノ節ヲ勵マシ、報效ノ誠ヲ竭シ、以テ 聖旨ニ答ヘ奉ラム  
 コトヲ誓フ。臣等幸ニ盛儀ニ班列シ、瑞雲ノ鳳殿ヲ繞リ、仁風ノ錦幢  
 ヲ眺スヲ望ミテ、聳慶躍悅ノ至ニ任フル無シ。臣重信帝國臣民ニ代  
 リ、恭シク大禮ヲ賀シ千萬歳ノ壽ヲ上ツル。臣重信誠懽誠喜頓首頓

大隈重信

舊佐賀藩士。維新の功臣。早稻田大學の創立者。大藏卿、外務大臣、内閣總理大臣等に歴任し侯爵を授けらる。大正十一年一月薨す。(二四九八年—二五八二年)

首謹ミテ言ス。

大正四年十一月十日

内閣總理大臣正二位勳一等伯爵 大隈重信(官報)

### 三 明治の文學

維新の偉業正に成りて、開國の國は一たび定るや、世間は西洋の物質的文明の輸入に急にして、和漢の學術、技藝を顧みるに違あらざりき。況や美術、文藝の如きは全く無用の長物とせられて、幾多の國寶は破棄せられ、無数の古典は廢紙となりぬ。この間にありて、纔に文學の微光を存せしものは獨新聞紙なりき。

新聞紙の刊行はこれ亦西洋に學びしものにして、當初は専ら政治論の機關とし、實用功利の論にあらでは以て時代思潮に追隨するに足らずとなしたりき。されど普通教育の制度漸く國內に普く

#### 合卷

青本、黄表紙などいひて、一卷五葉なりし草雙紙を、數卷合はせて、一冊に綴ちたるもの。

#### 佳人之奇遇

東海散士柴四朗の著。  
雪中梅  
鐵腸末廣重恭の著。  
經國美談  
龍溪矢野文雄の著。

して、文學の知識が中流以下の社會に擴張せらるると共に、新聞紙の經營者も亦これ等の讀者に對して、その娛樂となるべき文藝の作物を供給せざるべからざるを知りぬ。かくて幕末以降久しく失意の地にありし戲作者が、所謂「續物」と稱する合卷風の小説を紙上に掲げ初めしは、蓋し明治文學の萌芽なり。

從來筆を政治論にのみ執りたりし人人も、この種の文藝の人心に影響することの切なるを認めて、或は英佛の政治小説を翻譯し、或は新に脚色を立てて、自家の主張を具體的に説明せんことを企てたり。佳人之奇遇、雪中梅、經國美談等は當時最も喧傳せられしものにして、慷慨激越の調時に青年者流を感奮興起せしむるものなきにあらざりしかど、その豪放粗大の文はいまだ人情の機微に入らず、文學の眞諦を得たるものといふに足らざりき。

さもあれ、明治は既に十七八年を経たり。西洋の學術も技藝も稍



坪内逍遙等が文學論  
小説神髓等。  
硯友社  
尾崎紅葉その領袖たり。



福澤諭吉

咀嚼せられたり。世の先覺者は、かの徒に物質の皮相にのみ腐心することの愚なるを悟りぬ。文藝、美術の評價も日に漸く高からんとせり。この勢に乗じて坪内逍遙等が文學論の出づるあり。硯友社一派の新に旗幟を樹つるあり。在來の戯作者系の人人もこれに呼應して起てり。ここに所謂才筆家にもあらず、政論家にもあらず、熱誠なる態度を以て直に人生を描破せんとするものは、將に踵を接して出でんとせるなり。

思ふに、新文藝の勃興はなかば西洋文藝によりて啓發せられたり。されども他の一半は、我が國の古文學に淵源せるものなることを忘るべからず。蓋し維新以來日に隆なりし西洋文明の謳歌はここにその極に達して、その反動たる國粹保存論は盛に唱道せられ、

洛陽の紙價云

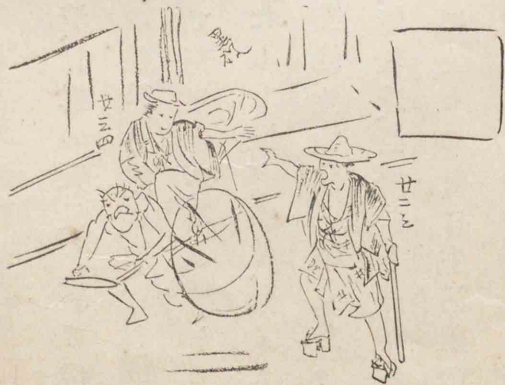
云 晉書文苑傳に、左思が三都賦のことをいひて、「於洛陽爲之紙貴」云々

尾崎紅葉 小説家。名は徳太郎。東京の人。又檀林風の俳諧を善くし、十千萬堂と號す。明治三十六年十月歿す。(二五二七年—二五六三年)

饗庭篁村 小説家。名は與三郎、別號竹の屋主人。東京の人。大正十一年六月歿す。(二五〇五年—二五八二年)

國語教育の獎勵、古文學の研究が隆昌を極めしはあたかもこの頃なりき。されば新文藝の先達は、啻に西洋の文學のみならず、我が國の古文學に回顧し、或は中古の文學に私淑するあり。或は元祿文學に摸倣するあり。我が文壇の泰斗として新篇出づる毎に洛陽の紙價を貴からしめし尾崎紅葉と幸田露伴とは、ともに西鶴を學びてその新文體を創めしものなりき。ここに注意すべきは、饗庭篁村が夙く八文字舍調の才筆を揮ひしことなり。

紅葉が艷麗の致は才人の情緒を寫すに長じ、露伴が遒勁の調は巧に男兒の意氣を描きぬ。良久しうして世間はこれに倦みぬ。乃ち



當世書生氣質下繪

河竹默阿彌  
通稱吉村新  
七。東京の人。  
明治二十六年  
一月歿す。(二  
四七六年―二  
五五三年)

依田學海

漢學者。名は  
百川。舊佐倉  
藩士。維新後  
文部省少書記  
官たり。詩文  
及び戯曲を能  
くす。明治四  
十二年十一月  
歿す。(二四九  
三年―二五六  
十年)

福地櫻痴

名は源一郎。  
長崎の人。東  
京日日新聞社  
長となり、後  
脚本家として  
才筆を揮ふ。  
明治三十九年  
一月歿す。(二

變化を題材に求めて、日に日に人生の暗黒面に向ひて進み去らんとせり。而して一の人心の要求をみたし、人生に理想を與ふるものあらざりき。

この時に方りて、東洋の一小島國は日清、日露の大役を経て俄然一等國の伴に伍せり。戰勝に酔ひし豪奢の餘弊と避けがたき財政上の壓迫とは、國民が生活難の聲となりて青年の耳朶に響きぬ。顧みれば、嘗ては文藝の形式をのみ評論したりし批評家は、漸く人生の研究に轉進し來りて、或は高山樗牛が美的生活論となり、或は綱島梁川が見神説となり、自然主義といひ、無理想、無解決と呼び、在來の一切の教權を放下すべしとさへ説くに至りぬ。既に生活難の聲にをのける青年は、徒に多岐に惑ひて煩悶するのみ。而して所謂自然派の小説は、一面偽り飾らざる告白において長を見ると共に、一面益人生の暗黒面を誇張して、好みて心身共に疲弊せる、氣概な

五〇〇年―二  
五六六年)

桂園の流

香川景樹の流  
派。桂園は景  
樹の雅號。

蒼虬

加賀の人。成  
田氏。關更の  
門。鳳朗、梅  
室、卓池と共  
に天保四老人  
の稱あり。天  
保十三年三月  
歿す。(二四二  
〇年―二五〇  
二年)

梅室

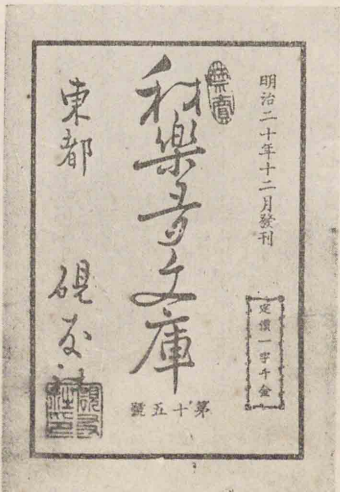
加賀の人。櫻  
井氏。關更の  
門。天保四老  
人の一。嘉永  
五年十月歿  
す。(二四二九  
年―二五二二  
年)

落合直文

國文學者。宮

く、操持なき青年の事蹟を描き、以て人生の實相を盡したりとなせり。かの煩悶せるものが、一時ここに同情者を得たるが如く感ぜしも宜なり。今や世間は漸く混沌たる思想界を出でて、更に高く、更に深き人生の眞意義を捉へんとし、倫理に、哲學に、宗教に、文藝に、秩序ある討究を重ねんとす。おもふに我が小説界が崇高偉大なる理想に逢著して、向上の一路を發見すべきは甚だ久しからざらんとするなり。

劇作方面においては、江戸時代掉尾の大家たる河竹默阿彌のなほ存するありて、多くの力作をその晩年に遺したれども、その擅場とする處はもとより舊時代の世話劇にとどまる。明治十一年以後



城縣の人。大學古典科出身。萩之家と號す。第一高等中學校教師となる。國學の興隆に力む。明治三十六年十二月歿す。(二五二一年—二五六三年)

正岡子規

俳人。名は常規。愛媛縣松山の人。新派俳句の主唱者。明治三十一年九月歿す。(二五二八年—二五六二年)

夏目漱石

文學者名は金之助。東京の人。東京帝國大學英文科出身。第五高等

新編 和歌 俳句 小説 戯曲 變遷を叙したり。最近の文壇において、最も注目すべきはこの種の文藝なればなり。さもあれ上古以來常に流行し來りし抒情、敘景の小詩形も、亦甚だ衰へたるに非ず。歌道には桂園の流を汲む者多く、俳道には蒼虬、梅室の門派のみ獨盛にして、和歌、俳句といへば専ら活社會と交渉なき閑人、隱者の

筆北柳島成

和歌 桂園 高崎正風 俳句 梅室 天保 蒼虬 落合直文 學謝野鉄幹 東京朝日新聞社に入り文筆に従事せり。大正五年十二月歿す。(二五二七年—二五七六年)

學校教授、東京帝國大學講師に歴任せしが、後辭して東京朝日新聞社に入り文筆に従事せり。大正五年十二月歿す。(二五二七年—二五七六年)

福澤諭吉

豐前中津藩士。慶應義塾の創立者。常に時勢の先覺者として、その言論當代を動せり。明治三十四年二月歿す。(二五〇五年—二五六年)

世界國盡

二冊。明治二年出版。外山、山名は正一。文

# 門外即天

福地源

筆 癡 櫻 地 福

間に行はれしもの明治初年の大勢なりき。但和歌はいはゆる幕末の志士、又は國學者の所作には、非常に痛切に、否むしろ露骨なる程當時の社會の現況に接觸したるもの少からずと雖も、その詩的價値に至りては疑なき能はず。後年かの國粹保存論、國文學の研究等盛なりし時に至りて、落合直文等とその門下生との手によりて漸く青年の社會に入り來りぬ。かくて偏に風雅を生命とせる月花の天地を小なりとして、活社會の人生を歌はんとする傾向を生ぜり。俳道には正岡子規出づるあり。天保の俗調を排して清新なる天明調を復活せしめ、更に進みて淡淡たる寫實の妙趣を鼓吹し、唯俳句のみならず、寫生文と稱する小品文の流行をも促しぬ。こ

佐々木信綱 心の花

學博士。静岡縣の人。東京帝國大學教授、同文科大學長、同大學總長、文部大臣に歷任す。明治三十二年三月歿す。(二五〇八年—二五六〇年)  
 新體詩抄 一冊 明治十五年出版。  
 成島柳北 名は弘。舊幕臣。朝野新聞社長として才筆を揮ふ。明治十七年歿す。(二四九七年—二五四四年)  
 三七雪嶺 文學博士。名は雄次郎。金澤の人。萬延元年五月生ま

の派より出でて筆を小説に著けたるものに夏目漱石等あり。殊に漱石の低回趣味は頗る明治文壇の異彩たり。  
 この他、明治の新文藝としては別に新體詩あり。明治の初年、福澤諭吉が著しし世界國盡は實にこの種のもの先驅なりき。後外山、山等が新體詩抄成るに及びてこの名稱始めて起り、漸く世に行はる。されど、その詞藻の稍乾燥なるに嫌らざるものは、或は中古語を以て西歐の詩趣を傳へんとするあり、或は漢語を用ゐて五七の單調を破らんとするあり、格調日に新なりと雖も、いまだ雄渾偉大にして眞に國民の詩歌と稱すべきものあらざるに似たり。  
 更に純文藝の範圍を出でて、専ら一代の文章の模範となりしものを求むるに、かの漢文訓讀風の文章が流行したりし日において、既に福澤諭吉、福地櫻癡、成島柳北等の平易明快なる文字あり。降りては三宅雪嶺、徳富蘇峯、高山樗牛、大町桂月等あり。その文各得失

る。  
 徳富蘇峯 名は猪一郎。熊本縣の人。文久三年正月生まる。貴族院議員、國民新聞社長。  
 高山樗牛 文學博士。名は林次郎。仙臺の人。明治三十五年十二月歿す。(二五三一年—二五六二年)  
 大町桂月 文章家。名は芳衛。高知縣の人。大正十四年五月歿す。(二五二九年—二五八五年)  
 佐佐政一 文學博士。醒雪と號す。東京高等師範學

ありと雖も、皆縦横自在にして、言はんとする所盡さざるはなし。現代の所謂普通文はこれ等の人人の筆致に負ふ所多きに似たり。  
 (佐佐政一の文による)

#### 四 芭蕉の臨終

芭蕉の死病は随分猛烈な痲病であつたらしい。彼は多くの忠實な情の深い弟子達の心をこめた介抱を受けつつこの世を去つた。しかもその烈しい病苦に對する忍従に至つては、苦めども亂れず、惱めども狂はぬ、靜なるたましひの把持者の莊嚴相は誠にただ崇敬の外はない。  
 病床に就いてから八日目の朝、芭蕉は去來を枕邊近く呼んで、「先の頃、野明が方に残り置き侍りし大堰川に吟行せし句、おほる川波に塵なし夏の月。」

校教授たり  
き。大正六年  
十一月歿す。  
（二五三二年  
一、二五七七  
年）

去來

蕉門十哲の  
一。向井氏。  
名は兼時、通  
稱平次郎。落  
柿舎と號す。  
肥前の人。京  
都に住す。寶  
永元年九月歿  
す。（二三一  
年一、二三六  
四  
年）  
野明  
芭蕉の門人。  
園女  
伊勢松坂の  
人。岡西惟仲  
の妻。芭蕉の  
門人。智鏡と  
號す。享保十  
一年四月歿

この句あまり景色過ぎたれど、大堰川の夏景色いひかなへたり  
と思ひ居たりしが、清瀧にて

清瀧や波に散りこむ青松葉

と作りて、事柄は變りたれど同案なりと人のいはんも如何なれ  
ば、「大堰川の句は捨て侍らん」と汝に申したり。然るに、頃日園女に  
招かれて

白菊の目に立てて見る塵もなし。

と吟じたり。これ又同案に似て句の道筋おなじ。それ故前の二句  
を一句に捨て侍りて、白菊の句を残し置き侍らんと思ふなり。汝  
が意如何。

こんなことを靜に語つたと云ふことを、「花屋日記」の中で、去來自ら  
書き記してゐる。そして去來は更にかう書き加へてゐる。

「去來涙を浮べ、名匠のかく名を惜み道を重んじ給ふありがたさ

す。（二三一三  
年一、二三八  
六  
年）

支考

蕉門十哲の  
一。美濃の人。  
各務氏。美濃  
派の祖。享保  
十六年二月歿  
す。（二三二七  
年一、二三九三  
年）

乙州

近江大津の  
人。芭蕉の門  
人。

よ、わづか句一章にさまで千辛萬苦し給ふ、御病惱の中に御骨折、  
風雅の深情こそ尊けれ。」

かやうに感歎した後で、去來は懇にその三句の何も同案とは見えぬ旨を述べて、師を慰めまゐらせたと自ら書いてゐる。一日に二十度、三十度の多きに達したと記されてゐる。烈しい下痢を、數日に互つて苦みつけつけてゐながらも、一念わが藝術の一途に集る時、かくも靜な、かくも明な、かくも嚴肅な心境が廓然として展開されるのであつた。ここに至つては、私達はもう讚歎の言葉をもち知らないのである。

日一日と容態が悪くなつた。死前五日の事であつた。やはり去來は支考、乙州等の勸により、師の枕邊に寄り添うていつた。

「古來鴻名の宗師多くは、大期に辭世あり。さばかりの名匠辭世はなかりしやと世世いふものあるべし。あはれ一句を残し給はば

諸門人の望足りぬべし。

衰へ果てた息の限をつくし、次郎兵衛といふ僕が傍から口をうるほすのに辛うじて力を得て、芭蕉は語りつづけた。

「きのふの發句は今日の辭世、今日の發句はあすの辭世、我が生涯いひ捨てし句句、一句として辭世ならざるなし。若し我が辭世はいかにと問ふ人あらば、この年頃いひ捨て置きし句、いづれなりとも辭世なりと申し給はれかし。」諸法從、本來常自寂滅相。これはこれ釋尊の辭世にして、一代の佛教この二句より外はなし。古池や蛙とび込む水の音。この句に我が一風を興ししより初めて辭世なり。その後百千の句を吐くにこの意ならざるはなし。ここを以て句句辭世ならざるはなしと申し侍るなり。

この事を記した支考は、「この語實に玄玄微妙、翁の凡人ならざるを知るべし」といふやうな氣のぬけた言葉で讚美してゐるに過ぎ

オヤの現象は元来身便を  
あはす

諸法從本來云  
法華經方便品  
の句。

Motto モットー  
標語。

ないが、芭蕉のこの言葉ほど適切に藝術にとりて千古のモットーたるべき言葉を、他に何人が殘し得たらうとおもはずには居られない。

「我が生涯いひ捨てし句句、一句として辭世ならざるはなし。」

何人も正にこの一句の前に襟を正すべきである。

旅に病みて夢は枯野をかけ廻る。

といふ彼の最後の句を弟子達に示した時にも、「これは辭世にあらず、辭世にあらざるにもあらず、病中の心なり。然しかかる生死の一大事を前に置きながら、いかに生涯好みし風流とは云ひながら、これも妄執の一つともいふべけん。今は本意なし」との歎聲を自ら禁じ得なかつた。

一方に自ら親とも慕ふ弟子達の温な情愛に、涙を流して感謝し、喜悅しないでは居られなかつた芭蕉は、これと同時に、他方に於い

て夢魂ひたすらに曠漠たる枯野を駆け廻る孤獨悲痛な旅人であつた。そこに芭蕉の矛盾があり、そこに芭蕉の調和があつた。

花屋日記十月十一日、即ち芭蕉終焉の前日の條に、病める師のたべ残しの粥を、去來がおし戴いて食べたことが書いてある。又その前後、惟然と正秀とが二人で一つの蒲團に寝て、お互に彼方へ引き此方へ引きして、二人とも終夜寝入らずに明し、しらじらと東の空の白むのに氣付いて、二人顔を見合はして笑ひ合つたといふことが書いてある。そしてその事をそのまま句に詠んで皆に示すと、一座どつと笑ひ、病中の師もさすがに笑を洩し給うたといふ事も書いてある。更にその日は暖な晴天であつたので、日向に蠅が澤山集つて來た。それを看病の人達が眞劍に糶にさして取りあつた。それを又病人が、暫時の後に疲れて苦むのも忘れて興じてゐた。かういふ事も書いてある。それから又師のかうした機嫌好きに乗じて、支

惟然

蕉門十哲の一人。美濃の人。

廣瀬氏。寶永

七年五月歿

す。(一三三七

〇年

正秀

芭蕉の門人。

句に詠んで

惟然「ひつば

りて蒲團に寒

き笑かな」。

正秀「思ひよ

る夜伽もした

し冬ごもり」

木節

近江大津の

人。醫を業と

す。芭蕉門下。

丈草

蕉門十哲の

一。尾張犬山

侯の重臣。内

藤氏、通稱林

右衛門。元祿

十七年歿す。

(一三二〇年

一三三六四

年)

其角

蕉門十哲の

一。近江堅田

の人。江戸に

住す。江戸座

の祖。寶永四

年二月歿す。

(一三二一年

一三三六七

年)

考が日頃考へてゐた師の句集編纂の事を師に諮らうとして、師の心をよく知つてゐた去來に叱られ、叱られて次の間に立つ寒さかなの一句を残して退いたことが書いてある。それを又病人が洩れ聞いて、氣を悪くしなかつたばかりか、むしろ可笑がつたといふ事も書いてある。何れも涙ぐまずに居られぬ光景である。

鬮とりて菜飯たたかす夜伽哉。

木 節

皆子なりみの蟲寒くなきつくす。

乙 州

うづくまる薬のものと寒さかな。

丈 草

吹井より鶴をまわかむ初しぐれ。

其 角

かく示された弟子達の作句の中から、芭蕉は特に丈草のを一句とり立てて、

「丈草出かされたり、いつ聞いてもさびしをり調ひたり。面白し、面白し」。

相馬御風  
文學者。名は  
昌治。新潟縣  
の人。明治十  
六年生まる。  
早稻田大學文  
科出身。

としはがれた聲で褒めたと云ふことも書いてある。それを批判した芭蕉の心はいかにも澄徹して居る。しかもそれは、彼の臨終を幾時間も隔つてゐない時のことであつた。(相馬御風——砂上漫筆)

### 五 涙の味を知る人間の生活

一、

かの西哲は、生を犠牲にして死を求めるのは罪惡であると教へ、俚言は「死んで花實が咲くものか」と諷した。もとより好んで死の淵を覗かうとするのではないが、いはゆる死生の境に出入する、即ち死に鄰るほどの苦痛な經驗を持つた人で無ければ、本當に生きる事のあり難さは味はれないといふ事が出来よう。本當に人生を泣いた人でなければ、人生の笑は理解されない。悲ある人でなければ天國の幸福は味はれない。人類の生活が續く限、人生には喜がある

に違ない。然し同時に人生には無限に涙が流れるに違ない。

畢竟人生は喜の中の涙であり、涙の中の喜であるといへよう。本當に人生の喜を噛みしめて見れば、其處に無限な人生の光や意義が潜んでゐる事を知るであらう。同様に、本當に人生の悲を噛みしめれば、其處から無限な人生の香味といふものを味識することが出来るであらう。

私達の感情を働して人生の諸相にぶつかつて行けば、喜か又悲か、この二つの氣分の何れかが、私達の生活面を何時も掩ふことになる。感情生活から云へば、喜も悲も同様に意義ある物として、あり難い物として、私達は受け容れて行かなければならない。私達の智慧を働して、生活の諸相にぶつかつて行けば、疑と信仰との二つの相剋した心持が、絶えず私達の生活面を掩ふことになる。この場合に於いても、私達は疑と信仰との二つを同じやうに尊い物として



感情の衝力を生ずるべく、悲し喜がアリ  
知慧の衝力を生ずるべく、疑と信仰が起る

受け容れなければならぬ。本當に深い疑の苦痛を持つた人でなければ、深い信仰の喜を見出す事は出来ないといふ事が出来よう。疑その物の内に信仰の芽は根ざして居る。一等恐しい事は信仰を持たない事ではなくて、既得の信仰の搖籃に凭りかかつて安眠してゐることである。信仰を持たない事は非常に寂しい事であり、苦痛な事である。然しその寂しさを感じ、その苦痛を持つてゐる間は、私達の生活には未來がある、伸び展つて行く内的な力が涌いてゐる。信仰は無限な旅の一里塚に過ぎない。まだ切り拓かれない無限の旅を歩かうとする内的な力は疑その物である。疑が深みへの歩を停めて休息した時信仰が生まれる。深みへ徹して行く疑の力の弱い者程早く信仰の安息所を築き上げる。

二、

この人生をも否定しようとした思想家達があつた。私はその人

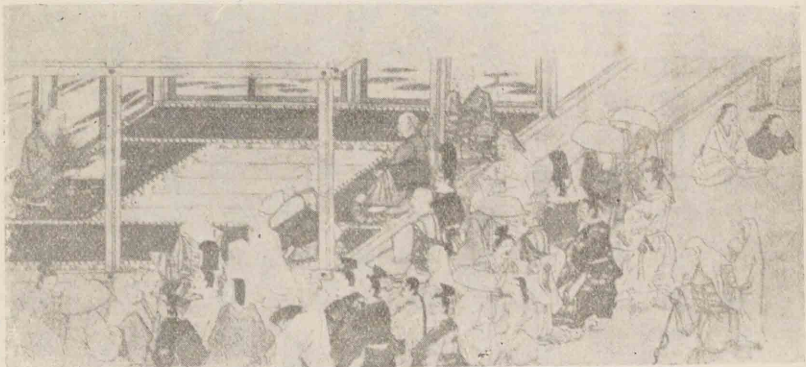
人の心持も理解することが出来る。實際人生は餘に寂し過ぎる。餘に空虚な感じがしないではない。けれども、私はこの人生に對してはまだまだ深い執著を持つてゐる。荒野のやうな人生の底から、色の光や、色色な力が無限に溢れてくる事を知つてゐる。

寂しさに耐へないで笛を吹く人は、一層切な寂しさを笛の音の中に見出すに違ない。然し笛を吹く人に取つては、その更に苦痛な寂しさこそ唯一の慰めである。

本當に人生の寂しさや、空虚さを感じる人に取つては、實はその寂しさや、空虚さこそ、彼の魂のパンとなるのである。彼等は人生に寂しさがある故に生きることを冀ふのである。彼等に取つては人生の寂しさ、人生の空虚さほど尊いものはない。小鳥が靜な秋の山を愛するやうに、彼等は靜寂な人生を愛する。

三、

法然上人  
 淨土宗の祖。  
 名は源空、漆  
 間氏。美作國  
 鞆岡の人。建  
 曆二年正月寂  
 す。(一七九三  
 年一八七二  
 年)  
 親鸞上人  
 一向宗の祖。  
 本願寺の開  
 基。京師の人。  
 名は範兼、日  
 野氏。弘長二  
 年十一月寂  
 す。(一八三三  
 年一八三二  
 年)



(傳繪人上然法) 法 説 の 人 上 然 法

たとひ法然上人にすかされて地獄へ  
 墮されても、後悔はしないといったのは  
 親鸞上人であつた。キリストはこの世界  
 を善しと見た。釋迦も孔子も人生をこの  
 上も無く生甲斐のあるものと見た。私達  
 はキリストにすかされ釋迦や孔子にす  
 かされて、たとひ地獄に墮されても悔い  
 ない程の信頼を抱いてゐたい。そして彼  
 等と同じ心で人生を見たい。もし親鸞が  
 法然に對して、あれ程強い信頼を持つ事  
 が出来なかつたとしたら、恐らく親鸞の  
 宗教は生まれなかつたらう。  
 キリストに對する信頼、釋迦に對する

信頼はやがて第二のキリストを生み、第二の釋迦を生む。私達は絶  
 えず疑に苦まなければならぬ。然し疑に苦む理由は人生を拒否す  
 る爲では無い。更に人生を突きつめて眞實に生きる爲である。疑が



人 上 鸞 親

深くなればなるほど、私達の心は偉  
 大な過去の人生に對する思慕、信頼  
 の念を強める。自分の生活を更に深  
 く、根強く如實にして行く爲の絶え  
 ざる疑は、何時もキリストを、或は釋  
 迦を、或は孔子を尊敬することを教  
 へてくれる。

四、

人間の心の底には不滅の光があり、美しさがあるといふことは  
 眞理である。然しそれと同時に人間の心の底には、滅する事の出来

ない闇があり、醜さがあることも眞理である。私達は、こんなにまで善い人があるかと驚くことが出来ると同時に、こんなにまで悪い人があるかと驚くことも出来る。全く人生には無上の善人もあれば、無下の悪人もある。

善い人ばかりを見ることの出来る人は幸福である。悪い人ばかりを見なければならなかつた人は禍である。然し、本當に人間が人間らしい生活をして行く爲には、善人をも知り、悪人をも知らなければならぬ。人間は皆善人ばかりだと思つてゐる人は、動もすれば餘に早く、餘に狭く地上に樂園を築き上げる。人間は皆悪人ばかりだと思つてゐる人は、日日、自分自身の爲に、暗い冷い墓穴を掘つてゐる。

人間の世界には多過ぎる程の不合理があり、悪があり、陰謀があり、打算がある。これは他の動物や植物の世界では見られない醜さである。けれども同時に人間の世界では愛がある、人の爲に自分の肉體を殺す程の獻身的行爲がある。其處には他の動物や植物の世界で見られない美しさがある。

私達は人間の醜さを突きつめて凝視しなければならぬ。その醜さを恥ぢなければならぬ。疫病のやうに恐れなければならぬ。同時に人間の美しさを感じなければならぬ。自分のうちに成長させなければならぬ。

## 五、

立派な藝術が絶えず人を高尚にし、人の魂を深くする如く、善い人間はその周囲の人人を高尚にし、魂を淨くしてくれる。悪い藝術に接することが、その人の魂を墮落させると同じやうに、卑劣な人間に接してゐると、私達の魂は日一日と曇らされて行く。悪い藝術ならば見ない方がよい、聽かない方がよい。悪い人間ならば、接しな

吉田絃二郎  
名は源次郎。  
佐賀縣の人。  
明治十九年生  
まる。早稻田  
大學英文科出  
身。現に同大  
學講師。

い方がよい、孤獨である方がよい。清濁併せ呑む」といふ事は、それが寛容といふ美しい心から現れて來て居る時はよいが、惡に對する敏い感じの缺乏から生まれて來た場合は呪はるべきものである。美しい一本の花を完全に育て上げる爲には、數十本、數百本の雜草を刈り取らなければならぬ。美しい花と雜草とは一つの畑では育てたぬ。(吉田絃二郎「小鳥の來る日に據る」)

### 六 いせの物がたり

#### 一、東 下

昔男ありけり。その男身をやうなきものに思ひなして、京には居らじ、東の方に住むべき所求めむとてゆきけり。信濃の國淺間の嶽に煙の立つを見て、

信濃なる淺間の嶽にたつけぶり

をちかた人の見やはとがめぬ。

もとより友とする人一人二人して諸共にゆきけり。道知れる人もなくて惑ひゆきけり。三河の國八橋といふ所に到りぬ。そこを八



(筆一抱)ふ會に者行修平業

橋といふことは、水の蛛手に流れ別れて木八つ渡せるに、よりてなり。その澤の邊の木蔭におり居て、乾飯くひけり。その澤に杜若いとおもしろく咲きたり。それを見て、或人の「かきつばたといふ五文字を、句の上に据ゑて旅の心を詠め」といひければ、  
から衣きつつなれにしつましあれば

八橋  
愛知縣碧海  
郡。今知立町  
の東に遺蹟あり。

宇津の山  
今宇津谷峠と  
いふ。静岡縣  
安倍郡と志太  
郡との界。

はるばるきぬるたびをしぞ思ふ。

と詠めりければ、皆人乾飯の上に涙落してほとびにけり。

行き往きて駿河の國に到りぬ。宇津の山に到りて、我が入らむと  
する道はいと暗う細きに、蔦かづらは茂りて物心細く、すすろなる  
目を見ることと思ふに、修行者逢ひたり。かかる道にはいかでかお  
はするといふに、見れば見し人なりけり。京にその人の許にとてふ  
み書きてつく。

駿河なるうつの山邊のうつつにも

ゆめにも人の逢はぬなりけり。

富士の山をみればさ月のつごもりに雪いとしろう降り。

時しらぬ山はふじの嶺いつとてか

鹿の子まだらに雪のふるらむ。

その山は、ここに譬へば、比叡の山をはたちばかり重ねあげたらむ

程して、なりは鹽尻のやうになむありける。

なほゆきゆきて、武藏の國と下總の國との中にいと大きな川  
あり、それをすみ田川といふ。その川のほとりに群れゐて思ひやり  
て、限なく遠くも來にけるかなとわびあへるに、わたし守はや船に  
乗れ。日も暮れなむといふに、乗りて渡らむとするに、皆人物わびし  
くて、京に思ふ人なきにしもあらず。さる折しも、白き鳥の嘴と足と  
あかき、鷓の大ききなる、水の上に遊びつつ魚をくふ。京には見えぬ  
鳥なれば、皆人見知らず。わたし守に問ひければ、これなむ都鳥とい  
ふを聞きて、

名にしおはばいざ言とはむ都鳥

わが思ふ人はありやなしやと。

と詠めりければ、船こぞりて泣きにけり。(伊勢物語による)

二、小野の御室

惟喬親王  
 文德天皇第一の皇子。小野宮と稱す。(一五三二年—五五七年)  
 水無瀬  
 今の大阪府三島郡廣瀬村。  
 右馬頭  
 在原業平。  
 交野の渚の院  
 大阪府北河内郡牧野村にあ  
 りき。

昔惟喬親王と申す皇子おはしましけり。山崎のあなたに水無瀬といふ處に宮ありけり。年毎の櫻の花盛にはその宮になむおはしましける。その時右馬頭なりける人を常にみておはしましけり。狩は懇にもせで、大和歌にのみかかれりけり。今狩する交野の渚の院の櫻ことにおもしろし。その木の下におり居て、枝を折りて挿頭にさして、上中下みな歌よみけり。馬頭なりける人のよめる。

世の中にたえて櫻のなかりせば

春のこころはのどけからまし。

となむ詠みたりける。またある人の歌

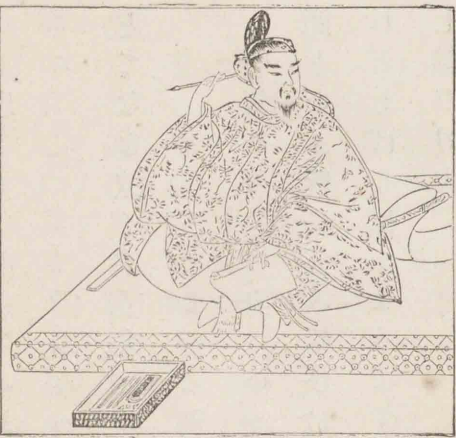
ちればこそいとど櫻はめでたけれ

うき世になにかひさしかるべき。

とて、その木の下を立ちて歸るに、日暮になりぬ。

歸りて宮に入らせ給ひぬ。夜更くるまで物語して、さてあるじの

小野  
 京都府愛宕郡。



在原業平(不院藏)

皇子入りて大殿ごもり給ひなむとす。十一日の月も隠れなむとすれば、かの馬頭よめる。

あかなくにまだきも月のかくるるか

山の端にげて入れずもあらなむ。

かくしつつまうで仕うまつりけ

るを、皇子おもひの外に御髪おろさ

せ給ひて、小野といふ處に住み給ひ

けり。正月に拜み奉らむとてまうで

たるに、比叡の山の麓なれば雪いと

高し。しひて御室にまうでて拜み奉

るに、つれづれといと物悲しくてお

はしましければ、やや久しく侍ひて、

古の事など思ひいで聞えけり。さても侍ひてしがなと思へど、おほ

長岡  
京都府乙訓郡  
向日町。

やけ事どもありければえさぶらはで、夕暮に歸るとて、

忘れては夢かとぞおもふ思ひきや

雪ふみわけて君を見むとは。

とてなむ泣く泣く來にける。(伊勢物語による)

三、さらぬ別

昔男ありけり。身はいやしけれど、母なむみこなりける。その母長岡といふ所に住み給ひけり。子は京に宮仕しければ、まうづとしけれどしばしばえまうでず。一人子にさへありければ、いとかなしうし給ひけり。

さるほどに、師走ばかりにとみの事とて御文あり。驚きて見れば、こと言はなくて、

古いぬればさらぬ別のありといへば

いよいよ見まくほしき君かな。

となむありける。これを見て馬にも乗りあへず参るとて、いといたう打ち泣きて道すがら思ひける、

世の中にさらぬ別のなくもがな

千代もといのる人の子のため。

(伊勢物語による)

七 幣のおひ風

一、口網

廿七日、鹿兒の崎といふ所に、守の兄弟、又こと人かれこれ酒など持ちて追ひきて、磯におり居て別れ難きことをいふ。守の館の人人の中に、この來る人人ぞ心あるやうにはいはれほのめく。かく別れがたくいひて、かの人人の口網も諸持にて、この海邊にて荷ひ出せる歌、

鹿兒の崎  
高知縣長岡  
とてなむ泣く泣く來にける。  
日記といふものを  
書きなす  
見むとて

惜しと思ふ人やとまると葦鴨の

うちむれてこそわれは來にけれ。

といひてありければ、いといたく愛でて、  
行く人のよめりける、

棹させどそこひ

知られぬわだつみの

ふかきところを

きみに見るかな。



紀 實 信 之 筆

つけて、唐歌ども時に似つかはしきをいふ。又ある人、西國なれど甲

といふ間に、襪取ものの哀も知らで、おの  
れし酒をくらひつれば、早くいなむとて、  
「潮満ちぬ、風も吹きぬべし」と騒げば、船に  
乗りなむとす。この折にある人、折節に

浦戸  
高知縣吾川  
の東。

斐歌など歌ふ。かくうたふに、船屋形の塵もちり、空ゆく雲もただよ  
ひぬ」とぞいふなる。今宵浦戸にとまる。〔土佐日記〕による

二、三笠山の月

廿日(正月)昨日のやうなれば船いださず、皆人人うれへなげく。苦  
しく心もとなければ、只日の経ぬる數を、今日いくか、廿日、三十日と  
數ふれば、およびもそこなはれぬべし。

よるはいもねず、いとわびし。廿日の月いでにけり。山の端もなく  
て海の中よりぞいでくる。かやうなるを見て、昔安倍の仲麿といひ  
ける人の、もろこしに渡りて歸りきたる時に、船にのるべき所にて  
かの國人うまのはなむけし、わかれ惜みてかしこのから歌作りな  
どしけり。飽かずやありけむ、廿日の夜の月出づるまでぞありける。  
この月は海よりぞ出でける。

これを見て仲麿のぬし、わが國にはかかる歌をなむ、神代より神



神も詠みたび、今はかみ、なか、しもの人も、かうやうに別をしみ、よろこびもあり、かなしみもある時には詠む」とてよめりける歌、

青海原ふりさけ見れば春日なる

みかさのやまにいでし月かも。

とぞ詠めりける。

かの國人聞き知るまじう覺えけれども、ことの心を男文字にさまを書きいだして、この詞つたへたる人にいひ知らせければ、こころをや聞きえたりけむいとおもひの外になむめできる。もろこしとこの國とは詞ことなるものから、月の影は同じことなるべければ、人の心も同じことにやあらむ。さて今そのかみを思ひやりてある人のよめる歌、

都にて山の端に見し月なれど

海よりいでて海にこそいれ。

〔土佐日記による〕

ある人  
紀貫之の自稱。

三、京入

山  
京都府久世郡なる男山なり。  
山崎の橋  
京都府乙訓郡橋本の地にありき。  
相應寺  
これも乙訓郡にありき。

十一日、雨聊か降りてやみぬ。東のかたに山の横をれるを見て、人に問へば、「八幡の宮」といふ。これを聞きて、喜びて人人をがみ奉る。山崎の橋みゆ嬉しきこと限なし。ここに相應寺のほとりに、しばし船をとどめて、とかく定むることあり。この寺の岸のほとりに柳おほくあり。ある人この柳の影の川の底にうつれるを見てよめる歌、

さざれ波よするあやをば青柳のかげの絲して織るかとぞみる。

十六日、けふの夕つ方、京に上るついでに見れば、山崎の店なる小櫃の繪も、まがりの法螺の形もかはらざりけり。賣る人の心をぞ知らぬ」とぞいふなる。かくて京へ行くに、島阪にて人あるじしたり。必しもあるまじきわざなり。立ちて行きし時よりも、くる時ぞ人はとかくありける。これにもそれにもかへりごとす。

島阪  
京都府乙訓郡山崎の附近。

桂川 京都府葛野郡。大堰川の下流。飛鳥川にも云云。古今集、詠者不詳。世の中は何か常なる飛鳥川きのふの淵ぞけふは瀬になる。

夜になして京に入らむと思へば、急ぎしもせぬほどに月出でぬ。桂川月あかきにぞ渡る。人人のいはく、この川飛鳥川にもあらねば、淵瀬更にかはらざりけり」といひて、ある人のよめる歌、

久方の月に

おひたるかつら川

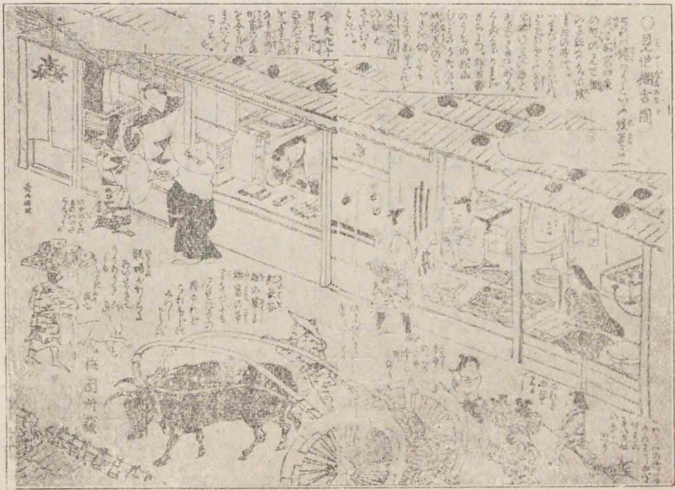
そこなる影も

かはらざりけり。

又ある人のいへる、

あまぐものはるかなりつる桂川

袖をひでても渡りぬるかな。



昔の世見の棚

またある人よめる、

かつら川わが心にも通はねど

おなじふかさには流るべらなり。

京のうれしきあまりに歌もあまりぞ多かる。

夜更けてくればとところどころも見えず。京に

入り立ちてうれし。

家に到りて門に入るに、月あかければいと

よくありさま見ゆ。聞きしよりまさりていふ

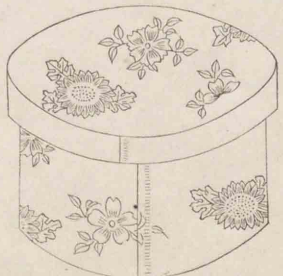
かひなくぞこぼれ破れたる。家を預けたりつる人の心も荒れたる

なりけり。中垣こそあれ一つ家のやうなれば、望みて預れるなり。さ

れば、たより毎に物も絶えず得させたる。こよひかかる事とこわだ

かに物もいはせず。いとほしく見ゆれど志はせむとす。

さて池めいてくぼまり水づける所あり。ほとりに松もありき。五



小櫃

年六年の中に千年や過ぎにけむ、片枝はなくなりにけり。今生ひたるぞ交れる。大方みな荒れにたれば、あはれとぞ人人いふ。思ひ出でぬことなく思ひ戀しきが中に、この家にて生まれし女子のもろ共に歸らねば、いかがは悲しき。船人も皆子抱きてののしる。かかるうちになほ悲に堪へずして、ひそかに心知れる人といへりける歌、  
生まれしも歸らぬものをわが宿に

小松のあるを見るがかなしき、

とぞいへる。なほ飽かずやあらむ。またなむ。

見し人を松の千年に見ましかば

とほくかなしき別せましや。

忘れ難く口惜しきこと多かれど、え盡さず。〔土佐日記による〕

## 八 古文學に現れた大和民族の根本性

儒教や佛教の感化を蒙らぬ我、我生粹の日本人の祖先といふものは、色色な方面の性質を兼ね備へた、わだかまりの無い、さつぱりした人達であつた。無論中にはさうでない人もあつただらうが、大體さういへると思ふ。彼等には、男らしい、強い、剛壯なところもあつた。優美な、優しい、情に厚いところもあつた。又滑稽、洒落な性質もあつた。さうして明い、清い、直なる心を以て仕事をして居つたのである。私は三種の神器は日本の國民性の標章になるもので、鏡は明い心を表し、玉は清い心を、劔は眞直な心を表して居ると思ふ。吾等の祖先はかやうな心を以て働いて、何か過があればその罪穢を祓つて、さつぱりと舊惡を忘れ、そしてすがすがしい心持になつて新生活に進み入つた。飽くまでも陽氣で、ひげ目を見せず、前途の光明を追うた。大昔から朝廷で行はれた儀式の一つに、六月と十二月との大祓といふのがある。これは六月の晦日と、十二月の晦日とに、親

王から大臣、諸役人、民百姓に至るまで、總べての日本人が、半年の間に觸れ犯した罪穢を祈り祓つて下さるといふ儀式である。その儀式に讀み上げる祝詞の大祓詞といふものの中に、かういふ事が書いてある。

安國と平けく知しめさむ國中に成り出でむ天の益人等が過ち犯しけむ種種の罪事は、天津罪とは畔放、溝埋、樋放、頻蒔、串刺、生剝、逆剝、尿戸、ここだくの罪を天つ罪と宣り分けて、國津罪とは生膚斷、死膚斷、昆蟲の災、高津神の災、高津鳥の災、畜たふし、蠱物せる罪、ここだくの罪出でむ。かく出でば、天つ宣言もて、大中臣、天握之木を本打ち切り、末打ち斷ちて千座置座に置きたらはして、天津菅麻を本刈り斷ち、末刈り切りて八針に取りさきて、天津祝詞の太祝詞言を宣れ。かく宣らば、天津神は天の磐門を押しひらきて、天の八重雲をいつの干わきに干別きて、聞き召さむ。國津神は高山

の末、短山の末に上りまして、高山のいほり、短山のいほりをかき別けて聞き召さむ。かく聞き召してば、皇御孫命の朝廷を始めて天の下四方の國には、罪といふ罪はあらじと、科戸の風の天の八重雲を吹き放つことの如く、朝のみ霧、夕のみ霧を朝風、夕風の吹き拂ふことの如く、大津邊に居る大船を舳綱解き放ち、艦綱解き放ちて、大海原に押し放つことの如く、彼方の繁木が本を燒鎌の敏鎌もちて打ち拂ふことの如く、この罪はあらじと祓へ給へ、清め給ふことを、高山の末、短山の末より、さくなだりに落ちたぎつ速川の瀬にます瀬織津媛といふ神、大海原に持ち出でなむ。かく持ち出で往かば、荒潮の潮の八百路の八潮路の潮の八百會にます速開津媛といふ神、持ちかかのみてむ。かくかか吞みてば、氣吹戸にます氣吹戸主といふ神、根の國底の國に氣吹き放ちてむ。かく氣吹き放ちてば、根の國底の國にます速佐須良媛といふ神

さすらひ失ひてむ。かく失ひてば、天皇が朝廷に仕へまつる官官  
の人等を始めて、天の下四方には、今日より始めて罪といふ罪は  
あらじ、云云。

即ち、これで半年の間に犯した罪や穢はもう綺麗さつぱりと無く  
なつた。過去の罪穢に懸念なく、新しい心を以て進んで、世の爲、人の  
爲に盡せといふのである。この過去の罪惡に後髪引かれずして、側  
目も振らずに新しい道に入るといふ、中根東里の所謂「出づる月を  
待つべし、散る花を追ふ勿れ」といふ思想は、大和民族の根本的性質  
の一つで、江戸つ子の洒落な性質なども、この國民性の遺つたもの  
であらうと思ふ。

中根東里  
儒者。伊豆下  
田の人。名は  
若思、通稱貞  
右衛門。陽明  
學を唱ふ。明  
和二年 月歿  
す。(二三五四  
年) 四二五  
年)

さて、かやうに罪を祓つて綺麗さつぱりとなつて安心して、暢氣  
に遊べといふのかといふに、さうではない。かく綺麗さつぱりとな  
つた上は、明い、淨い、直なる誠の心を以て、益進んで光明ある事業を

現御神止  
大和國  
所和皇大詔  
宣大詔  
止後麻

なせといふのである。文武天皇の嘗て下し賜うた宣命の中に、  
明き、淨き、直き誠の心もちて、いや進み進みて、緩み怠ることなく  
務めよ。

と仰せられたのが、實に立派な御詞であるが、私は前の大祓の  
祝詞と、この文武天皇の宣命とを合はせて、我々大和民族の長へに  
肝銘すべき座右の銘とすることが出来ると思ふ。

かやうに強い所、優しい所、しやれた所を兼ね備へ、明い、清い、眞直  
な心を以て、積極的に、ひげ目なく、事業を爲した人は、大昔の世に少  
からずあつた。素盞鳴尊もさうであつた。又大國主命などもさうで  
あつた。大國主命が悪人の兄君には、いぢめられ、父君には、さいなま  
れ、自然と戦ひ、蠻族と戦つて、出雲朝廷を建てられたのは、なかなか  
容易な事業ではない。しかもその間にあつて、始終善い、正しい、光明  
のある事業を目的として進まれたのは、實にこの國民性を實現せ

られたものである。神武天皇もこれ等の國民的美質を遺憾なく發揮せられた御方である。日本武尊なども亦さうである。

日本武尊は非常に眉目秀麗なる貴公子であつた。さうして武勇絶倫の御方であつた。父帝の命によつて千里を獨往して、筑紫に熊襲の巨魁を誅戮せられ、大功を建てて都に歸られる。直に又東夷の征伐を命ぜられて打ち立たれた。程なく、東夷を平げられる。歸るさに、近江の伊吹山の山靈の毒氣に中つて伊勢にて薨去せられたが、薨する時にも尙陽氣な、積極的の光明性を失はれずして、名高い「國思の歌」を詠まれた。

命の全けむ人はたたみごも平群の山の

熊櫛が葉を警華にさせその子。

而して、薨じて後に尊の御靈が白鳥となつて天翔つて行かれたといふことである。日本武尊は武勇も優れ、智慧も優れ、文藝の才もな

伊吹山  
滋賀縣阪田郡。

命の全けむ云  
古事記中巻に出づ。  
平群の山  
奈良縣生駒郡。

はしけや  
我が家の方後ヨ  
要居を来カ

かなか優れて居られた。そして明い、清い、眞直な、誠の心を以て君の爲國の爲に盡され、艱難辛苦の間にあつて撓なく進まれた。これ等の點は皆それなりに偉いけれども、私の特に面白い、あり難いと思ふのはこの「國思の歌」である。自分が死に臨みながら、遙に故郷人に言寄せて、「命の全い健な人は、くよくよせず、平群の山に茂つて居るあの熊櫛の葉を髪にかざして、陽氣にあそび樂め、故郷人よ。これ我がいまはに臨んでお前達に望む所である」と云はれたのは、その積極性、光明性、進んで止まざる、ひげ目の見えざる心持が見えて實に面白いではないか。儒佛の思想に累せられた後世の人間ならば、「亡き後に一遍の回向を頼む」とか、「生ある者の死ぬるのは據ない」とかいふ所であらうが、神ながらの純粹の大和心を以て、「死ぬる者は死ぬ。俺は仕方がないが、達者な者は大いに陽氣に遊ぶが好い」といって居られる。今の言葉でいふならば、飽くまでも生を樂み味ふが

百しきの云云  
新古今集に出  
でたる山部赤  
人の歌。

好いといふのである。實に愉快なうまい事をいはれたものである。私はもう一つこの熊檮の葉をかざすといふ事に非常な興味を感じて居る。後の王朝の公卿達は、  
百しきの大宮人はいとまあれや

櫻かざしてけふも暮しつ。

といふ歌の示すとほり、仕事の無いままに暢氣に櫻をかざして、今日も明日もと遊び暮したものであつたが、日本武尊は兵馬倥傯の世にあつて、熊檮の葉をかざして遊べといはれた。櫻は美しい花であるけれども、脆い果敢ない花である。檜の葉は面の艶は無いけれども、厚い、堅い、霜雪に堪へる堅實なものである。まづ西洋の月桂樹そつくりといつてもよい。月桂樹も結構である、櫻も結構である。けれども私はそれよりも、二千年前に日本武尊の御歌に現れた熊檮の葉が、一層日本國民の心持を標章するに適して居ると思ふ。熊檮

五十嵐力  
文學博士。早  
稲田大學文學  
部長。米澤市  
の人。明治七  
年生まる。

藤原為業

延喜の帝  
醍醐天皇。

を櫻の花と相並べて、日本の標章にするのも亦面白いと思ふ。殊に日本武尊の薨後、その御靈が白鳥となつて大空高く天翔つて行かれたといふから、日本武尊を背景として、檜の葉に白鳥を配し、これを日本の國民性のおもなる一面、殊に文藝の方面の標章としたならば非常に面白いと思ふ。

とにかく、太古の日本人は堅い、柔い、強い、優しい、男性的、女性的、勇悍、優美、色色な方面の性質を備へ、さうして明い、清い、直な心を以て飽くまでも陽氣に、積極的に進んで仕事するといふ質であつた。

(五十嵐力—作文三十三講)

### 九 鏡の影

#### 一、時平の敎勸

延喜の帝世間の作法したためさせ給ひしかど、過差をえしづめ

本院の大臣  
左大臣藤原時  
平。基經の長  
子。延喜九年  
四月薨す。(一  
五三一年—一  
五六九年)

させ給はざりしに、本院の大臣制を破りたる御さうぞくのことの外にめでたきをして、内にまゐり給ひて殿上に侍ひ給ふを、帝小菴より御覽じて、御氣色いとあしくならせ給ひて、職事をめして、世間の過差の制きびしき頃、左の大臣の、一の人といひながら美麗ことの外にてまゐれる便なきことなり。速にまかり出づべきよし仰せよと仰せられければ、職事うけ給りて、いかならむと恐れ覺えけれど、参りて、わななくわななくしかじかの事と申しければ、いみじく驚きて、畏り承りて、御隨身のみ前参るも制し給ひて急ぎまかり出で給ひ、一月程門をささせて簾の外にも出で給はず。人などの参るをも、勘當の重ければとて會はせ給はざりけり。さてこそ世の中の過差はやみたりしか。内内に承りしには、かくてばかりぞ靜らむとて、帝と御心あはせさせ給へりけるとぞ。(「大鏡」による)

二、鶯宿梅

天曆  
村上天皇の御  
代の年號。

天曆の御時に、清涼殿の御前の梅の木の枯れたりしかば、もとのさせ給ひしに、なにがしの主の藏人にておはせし時、承りて一京まかりありきしかども侍らざりしに、西の京のそこそなる家に、色濃く咲きたる木のやうだ美しきが侍りしを掘り取りしかば、家あるじの、木にこれ結びつけてもて参れといはせ給ひしかば、あるやうこそはとてもて参りて候ひしを、何ぞとて御覽じければ、女の手にて書きて侍りける。

救なればいともかしこし鶯の

宿はととはばいかか答へむ。

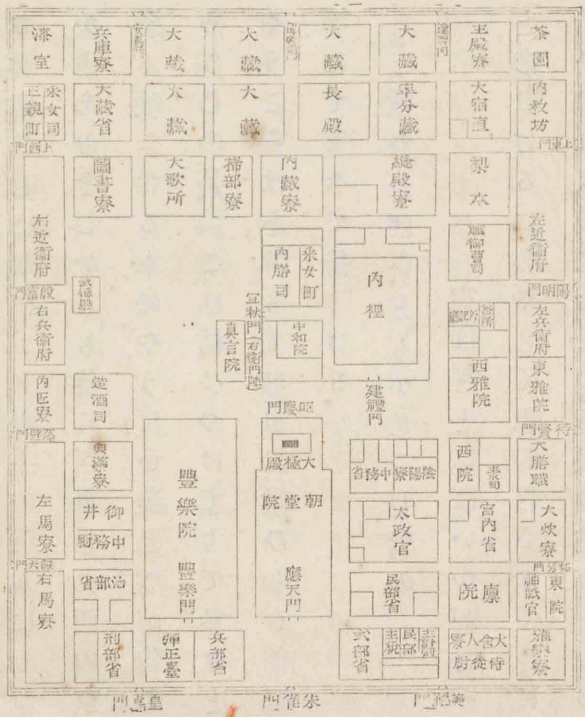
とありけるに、あやしく思し召されて、なに者の家ぞとたづねさせ給ひければ、貫之ぬしの御娘の住むところなりけり。遺恨のわざをもしたりけるかなとて悔いおはしましけり。(「大鏡」による)

三、けぶり屑

娘  
紀内侍とい  
ふ。古今六帖  
の著者とぞ。



花山院の御時に、五月下の間に、五月雨も過ぎていとおどろおどろしくかきみだれ雨の降る夜、帝寂しくや思し召しけむ殿上に出でさせおはしまして遊びおはしましけるに、人物語り申しなどし給ひて、昔怖しかりし事どもなど申させ給へるに、今宵こそいとむくつけき夜なれ。かく人勝なるにだに怖しく覺ゆ。まして物離れたるところなどいかならむ。さらむ處にひとりいなむや」と仰せられるに、人人「えまからじ」とのみ申し



入道殿

藤原道長。兼家の第五子。一條天皇以下四朝に歴仕し、攝政關白太政大臣たり。晩年法成寺を造りて居る。世に御堂關白と稱す。萬壽四年十二月薨す。(一六二六年—一六八七年)

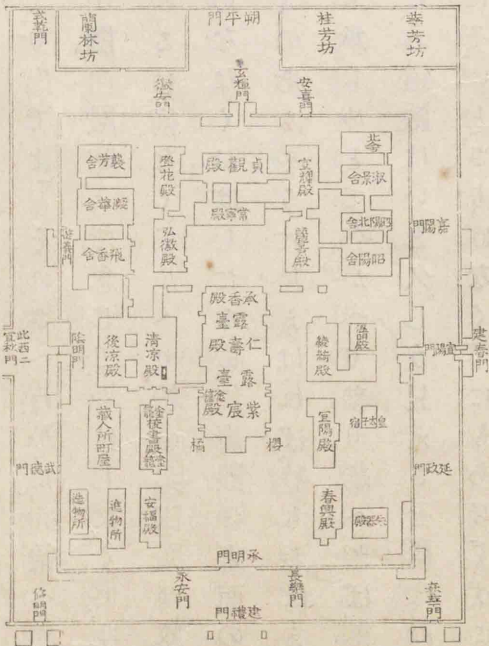
道隆

兼家の第二子。内大臣、關白攝政となる。長徳元年四月薨す。中關白と稱す。(一六〇七年—一六五五年)

道兼

兼家の第三子。長徳元年

給ひけるを、入道殿は、いづくなりともまかりなむと申し給ひければ、いと興あることなり。さらばいけ。道隆は豊樂院、道兼は仁壽殿の塗籠、道長は大極殿へいけと仰せられければ、よその君たちは便なき事をも奏してけるかなと思ふ。又承り給へる殿原は御氣色かはりて、益なしとおぼしたるに、入道殿はつゆさる御氣色なくて、私の従者をば具し候はじ。誰にても一人昭慶門まで送れ」と仰言たべ。それより内にはひとり入り侍らむと申し給へば、證なき事にこそと仰せらるれば、げにとて御手箱にお



五月終す。粟田關白又十日關白と稱す。(一六二一年)一六五五年

ガマンス

露臺  
仁壽殿前にあり。

かせ給へる小刀さして起ち給ひぬ。今二所もにがむにがむ各おはしましぬ。  
かく仰せられ議する程に丑にもなりにけむ。道隆は右衛門の陣より出でよ。道長は承明門より出でよとそれさへわかたせ給へば、しかおはしましあへるに、中關白殿陣まで念じておはしたるに、ゆく手に怪しき聲どもの聞ゆるに、術なくてかへり給ふ。粟田殿は露臺のあたりまでわななくわななくおはしたるに、仁壽殿の東面の砌のほどに、軒とひとしき人のあるやうに見えければ、物もおぼえで、身のあらばこそ仰言をも承らめとて各かへり参り給へれば、御扇をたたきて笑はせ給ふに、入道殿はいと久しう見えさせ給はぬを、いかがと思し召すほどにぞ、いとさりげなく事にもあらずげにて参らせ給へるに、「いかにいかに」と問はせ給へば、「いとのどやかに、御刀に削られたるもの」を取り具して奉らせ給ふに、「こは何ぞ」と仰

オトク  
ワケ

せらるれば、「ただにて歸り参り侍らむは證候ふまじきによりて、高御座の南面の柱のものを削り取りて候ふなり」と申し給ふに、「いとあさましう思し召さる。こと殿たちの御氣色は今にもなほ直らで、この殿のかくてまゐり給へるを、帝よりはじめ感じののしり給ふが羨しきにや、又いかなるにか、物もいはず侍ひ給ひける。つとめて藏人して削屑を押しつけさせて見給ひければ、つゆ違はざりけりとぞ。そのけづり痕は今にいとけざやかにて残りけり。」

〔大鏡〕による

四、大堰川の三船

ひととせ入道殿の大堰に逍遙させ給ひしに、作文の船管絃の船、和歌の船と分たせ給ひて、その道にたへたる人人を乗せさせ給ひしに、公任の大納言殿のまゐり給へるを、入道殿、かの大納言いづれの船にか乗らるべきと宣はすれば、「和歌の船に乗り侍らむ」と宣

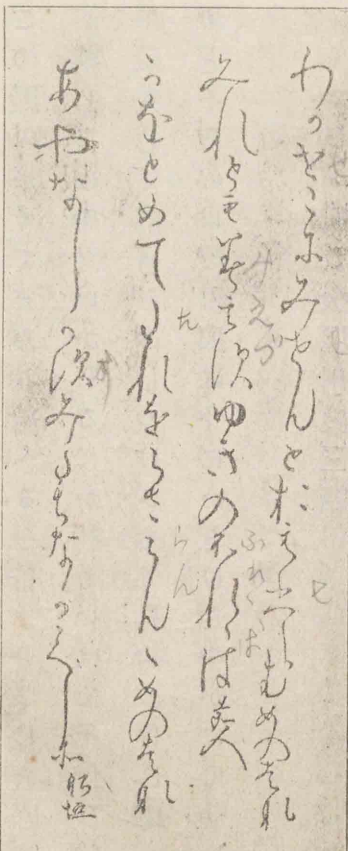
公任  
藤原氏。關白  
頼忠の長子。

四條大納言と稱す。長久二年正月薨す。(一六二六年一七〇一年)  
小倉山  
京都府葛野郡嵯峨村。

ひて、その船に乗りてよみ給へるぞかし。  
小倉山あらしの風のさむければ

紅葉のにしききぬ人ぞなき。

申しうけ給へるかひありて遊ばしたりな。御自らも宣ふなるは、作



藤原公任筆

文の船にぞ乗るべかりける。さてかばかりの詩を作りたらましかば、名

詩聖杜甫

李白  
字は太白、青蓮と號す。隨西成紀の人。志氣宏放、逸才あり。船中八仙の一。(西曆七〇一年一七六二年)  
杜甫  
字は子美、少陵と號す。襄陽の人。俗に杜牧に對して老杜と稱せらる。(西曆七〇二年一七七〇年)

道にもぬけ出で給ひけむは、古もあらぬ事なり。(大鏡による)

### 一〇 詩聖杜甫

盛唐の詩人はいづれも高材逸足斯道の選手たるが中に、天馬空をゆく概あるは詩仙李白なり。香象海を渉る觀あるは詩聖杜甫なり。

杜甫は忠君愛國の詩人と稱すべきと共に、又家庭的詩人といふを得べし。彼の全集には事の國家帝王時事に關するもの最も多く、これに次いで家族に關するもの多し。世にその國を愛してその家を愛せざるものなく、その君に忠にしてその家族に無情なるものあらず。彼の眼中には國は家の擴大せられたるものにして、家は國の縮小せられたるものなり。彼の忠君愛國は抽象的にあらずして、その妻子弟妹を愛するの情を推し及したるものなり。支那の詩

人上は詩經より下は明清の諸家に至るまで、その家に對して多少の詩思を寄せざるものなしといへども、いまだ彼が如き家庭的詩人を見出す能はざるなり。試にその「進艇」の作を見よ。

南京久客耕南畝、北望傷神坐北窓、  
晝引老妻乘小艇、晴看稚子浴清江、  
俱飛蛺蝶元相逐、並蒂芙蓉本自雙、  
茗飲蔗漿携所便、  
蠶盃無謝玉爲缸。

これ成都に於ける浣花草堂生活中の消息なり。その一家和樂の状は千載の下なほ活躍するを覺ゆ。夫婦小艇に乘じ、稚子清江に浴す。艇上の蛺蝶は俱に飛び、水邊の芙蓉は蒂を並ぶ。先生貧なりといへどもその樂決して貧ならざるなり。人類ありて以來詩人多からずとせず。然も彼が如き清福を贏ち得たるものそれ幾許かある。その江村卜居の作中句あり曰はく「老妻晝紙爲棊局、稚子敲針作釣鉤」と。貧家の生活も此に至りてむしろ羨むべきを見る。

成都  
支那四川省の  
首都。  
浣花草堂  
浣花溪なる杜  
甫の家の稱。

もしそれ彼が春望の五律の如き、

國破山河在、城春草木深、感時花濺淚、恨別鳥驚心、  
烽火連三月、家書抵萬金、白頭搔更短、渾欲不勝簪。

如何なる鐵石の心腸を有する者も、誦し來りて黯然たらざるものあらず。詩としても絶調なり。情としても絶調なり。「家書抵萬金」の一句は眞に彼の胸奥より涌き出でたるなり。同時に「遣興」の詩あり。

驥子好男兒、前年學語時、問知人客姓、誦得老夫詩、  
世亂憐渠小、家貧仰母慈、鹿門携不遂、雁足繫難期、  
天地軍麾滿、山河戰角悲、倘歸免相失、見日敢辭遲。

彼の心は實に此の稚子に惓惓たりしなり。又「元日示宗武」の作に曰はく、

汝啼吾手戰、吾笑汝身長、處處逢正月、迢迢滯遠方、  
飄零還柏酒、衰病只藜床、訓諭青衿子、名慙白首郎、  
賦詩猶落筆、

至德二載  
唐の肅宗の即位二年。  
大歷三年  
同代宗の即位六年。

獻壽更稱觴、不見江東弟、高歌淚數行。

前詩は至德二載の春にして、即ち彼が四十五歳の作、後詩は大歷三年正月元日、即ち彼が五十七歳の作なり。僅に父の詩を誦するを學びたる驥子も、今は一箇の青年となりぬ。吾人はこれを讀んで、如何に彼がその子に愛著したるかを知り、又その同胞に眷眷たるかを知るなり。

彼の愛はその妻子のみならず、實に弟妹に及べり。かの同谷縣七歌のうちの第三首と第四首とは、弟と妹とを題目とせり。有弟有弟在遠方、三人各瘦何人強と、又いはく、有妹有妹在鍾離、良人早歿諸孤癡と。その他集中に散見する彼が同胞を懷ふの詩枚舉に遑あらず。彼や眞に家庭的若しくは家族的詩人たるに愧ぢざるなり。

彼は徹上徹下人事的詩人なり。如何なる場合にも人間を主題とすることを忘れざるなり。或は國家の上において、或は君臣の上

において、或は交友の上において、或は家族の上において、或は自己の上において、その接觸する方面には、時と場合とによりて幾多の相違あるも、到底人間を離れては彼の詩あらざるなり。人は唯人を以てその伴侶となすもの、杜甫においてこれを見る。

彼は天然と没交渉にあらず。然も彼は天然を天然として觀察せず、これを人事の背景として觀察せり。否切言すれば、彼は天然を人事化せずんばやまずといふも妨なかるべし。これ彼が王摩詰一流の詩人とその趣を異にする所以なり。

彼は天然に對しても異常なる爛眼を有したり。然して他人の千百言にしてなほ盡す能はざる所のもの、彼は唯一兩句にして十二分の諒會を與ふ。彼はその爛眼に匹敵する偉大なる用語の力をも有せり。然して彼の擅場は精緻巧妙なる天然の小幘密畫にあらずして、大筆淋漓一掃的の描寫にあり。例せば「野望」の五律の如き、

王摩詰  
王維のこと。  
摩詰はその字。尙書右丞に至る。詩人にして畫手。  
(西曆六九九年—七五九年)

清秋望不極、迢遞起層陰、遠水兼天淨、孤城隱霧深、葉稀風更落、山迴日初沈、獨鶴歸何晚、昏鴉已滿林。

かくの如く描寫雄大にして始めて彼の本色を發揮するに足るなり。然して吾人はこの詩を誦して、言外に志士遲暮の感慨を會取せざらんとするも能はず。彼は唯「獨鶴歸何晚」の一句を挿みて忽ち天然を人事化し了れり。これ實に彼の慣用手段なり。更に「旅夜書懷」の作を見よ。

細草微風岸、危檣獨夜舟、星垂平野闊、月涌大江流、名豈文章著、官應老病休、飄飄何所似、天地一沙鷗。

江頭孤舟を泊し、自ら身世を願望して「天地一沙鷗」に比す。その志復悲むべからざらんや。

彼は實に花に涙を濺ぐ詩人なり、鳥に心を驚す詩人なり。彼は實に天然を天然として觀る能はざる詩人なり。(德富蘇峯——杜甫と彌耳敦)

都良馨

文章博士。博覽強記、最も詩文に長じ、吟詠神に入ると稱せらる。元慶三年卒す。(一五〇四年—一五三九年)

志貴皇子

又施基皇子に作る。天智天皇の第二皇子、光仁天皇の御父。靈龜二年八月薨す。光仁天皇の朝春日宮天皇の尊號を追贈せらる。(一三七五年)

菅文時

文章博士。菅原道眞の孫。博學洪才當時に冠たり。天

朗詠數則

早春

都良馨

氣霽レテハ風新柳ノ髮ヲ梳リ 氷消エテハ浪舊苔ノ鬚ヲ洗フ。

志貴皇子

いはそそぐたるみのうへの早蕨の

もえいづる春になりにつけるかな。

花

菅文時

日ニ瑩カレ風ニ瑩カル高低千顆萬顆ノ玉 枝ヲ染メ浪ヲ染ム、表裏一入再入ノ紅。

素性法師

見てのみや人にかたらむさくら花

德四年九月薨す。世に菅三品と稱す。(一五五九年—一六四一年) 素性法師 俗名良岑玄利。僧正遍昭の子。出家して律師となる。

手ごとくにをりて家づとにせむ。  
白 樂 天  
首 夏  
饗頭ノ竹葉ハ春ヲ經テ熟シ、階底ノ薔薇ハ夏ニ入ツテ開ク。  
源 順  
わが宿のかきねや春をへだつらむ  
夏きにけりと見ゆるうの花。  
源 英 明

源順 擧の子。和歌に巧に文を善くす。梨壺五人の一人。永觀元年四月卒す。(一五七一年—一六四三年)

納 涼  
池冷ウシテ水ニ三伏ノ夏ナク、松高ウシテ風ニ一聲ノ秋アリ。  
源 英 明

源英明

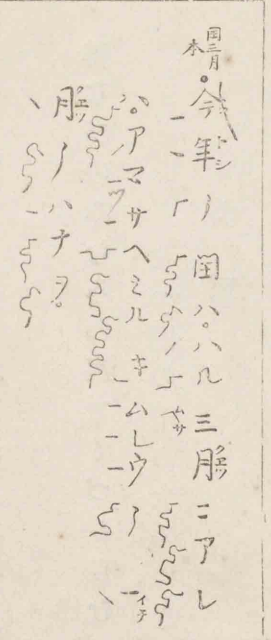
齊世親王の子。四位左中將。元慶二年卒す。(一一五九九年)

八月十五夜  
紀 長 谷 雄  
十二廻ノ中コノ夕ノ好ニ勝ルハナク、千萬里ノ外各ワガ家ノ光ヲ争フ。  
詠 者 未 詳

劉元叔 唐の人、名に敬和、一字平叔。高宛縣の令たりき。

紀貫之 望行の子。歌仙の稱あり、又文に巧に書を善くす。古今集撰者の一人。御書所預、土佐守、木工權頭等に歴任す。天慶九年卒す。(一一六〇六年)

しら雲にはねうちかはしとぶ雁の  
かずさへ見ゆるあきのよの月。  
擣 衣



から衣うつこゑきけば月きよみ  
まだねぬ人を空にしるかな。

雪  
雪ハ鵝毛ニ似テ飛ンデ散亂シ、人ハ鶴鬣ヲ被テ立ツテ徘徊ス。  
白 樂 天

劉 元 叔  
北斗ノ星ノ前ニ  
旅雁横タハリ、  
南樓ノ月ノ下ニ  
寒衣ヲ擣ツ。  
紀 貫 之

源景明  
兼光の子、傳  
詳ならず。

大江澄明  
朝綱の子。官  
民部少輔に至  
る。

高向草

醍醐天皇頃の  
人。傳詳なら  
ず。

みむろ

三室山又神南  
備山といふ。  
奈良縣生駒郡  
龍田村。

源公忠

醍醐天皇の朝  
右大辨とな  
る。世に滋野  
井辨と稱す。

都にてめづらしとみるはつ雪の

よし野の山にふりにけるかな。

山 水

大 江 澄 明

山復山、何レノ工カ青巖ノ形ヲ削リ成セル、水復水、誰ガ家カ  
碧潭ノ色ヲ染メ出セル。

高 向 草 春

神なびのみむろの峯やくづるらむ

たつ田の川の水のにされる。

將 軍

源 順

雄劔腰ニ在リ、抜クトキハ則チ秋霜三尺、雌黄口ヨリス、吟ズ

レバ亦寒玉一聲。

源 公 忠

玉くしげふたとせあはぬ君が身を

あけながらやはあらむと思ひし。

帝 王

紀 淑 望

仁ハ秋津洲ノ外ニ流レ、惠ハ筑波山ノ陰ヨリモ茂ク、淵變

ジテ瀬トナル聲、寂寂トシテ口ヲ閉ヂ、砂長ジテ巖トナル頌

洋洋トシテ耳ニ滿テリ。

### 一一 法成寺

今は御心地例さまになりはてさせ給ひぬれば、御堂の事思し急  
がせ給ふ。攝政殿國國までさるべき公事をばさしおきて、まづこの  
御堂の事を先に仕うまつるべき仰言のたまふ。殿の御前も、この度  
生きたるは別事ならず。この願の協ふべきなめり」と宣はせて、他事  
なく唯御堂におはします。

攝政殿  
藤原頼通。道  
長の長子、世  
に宇治關白と  
稱す。承保元  
年二月薨す。  
一六五二年  
一七三四年  
殿の御前  
藤原道長。

紀淑望  
長谷雄の子。  
五位大學頭に  
至る。(一一五  
七九年)



方四町をこめて、大垣にして瓦葺きたり。さまざまに思しおきて急がせ給へば、夜の明くるも心元なく、日の暮るるも口惜しうおぼされて、夜もすがらは、山を疊むべきやう、池を掘るべきさまを思しめぐらし、木を栽ゑなべさせ、さるべき御堂御堂、方方さまざまつくりつづけ給へり。御佛はなべての様にやはおはします。丈六の金色の佛を數も知らず造りなべ、北南と馬道をあけて、道をととのへ作らせ給ふ。鶏の鳴くも久しくおぼされ、宵曉の御行もおこたらず、やすきいも大殿ごもらず、ただこの御堂のこのみ深く御心にしませ給へり。

日に多くの人人参りまかんでして立ちこむ。さるべき殿原をはじめ奉りて、宮宮の御封御庄どもより、一日に五六百人、千人の夫どもを奉るも、人の數多かることをば畏きことにおぼしたち、國國の守ども、地子、官物はおそなはれども、只今はこの御堂の夫役、材木



法成寺建築の古畫

檜皮、瓦など多く参らすることを、我も我もと競ひ仕うまつる。大方近きも遠きも参りこみて、品品、方方あたりあたりに仕うまつる。或所を見れば、御佛つかうまつるとて、佛師ども百人ばかりなみ居て仕うまつる。同じくはこれこそめでたけれと見ゆ。御堂の上を見上ぐれば、匠工ども二三百人のぼり居て、大きな木どもには、太き綱をつけて聲を合はせて、えさまさと引き上げさわぐ。御堂の内を見れば、佛の御座づくりかが

大津 滋賀縣滋賀郡。  
 梅津 京都府葛野郡。  
 須達長者 釋迦在世當時の舍衛國の富者。波斯匿王の大臣。  
 祇園精舍 印度の寺の名。釋迦說法の道場。

やかす。板敷を見れば木賊、椋の葉などして、四五十人なみ居て手毎に磨き拭ふ。檜皮葺、壁塗、瓦作なども敷をつくしたり。又老いたる翁などの、三尺ばかりの石を心に任せて切りととのふるもあり。池を掘るとて四五百人下りたち、山を疊むとて五六百人のぼり立ち、又大路の方を見れば、力車にえもいはぬ大木どもに綱をつけて叫びののしり引きもてのぼる。鴨河の方を見れば、筏といふものに、樽材木を入れて、棹さして心地よげに歌ひののしりてもてのぼるめり。大津梅津の心地するも、西は東といふことはこれなりけりと見ゆ。磐石といふばかりの石を、はかなき筏にのせて率て來れど沈まず。すべていろいろ様様言ひつくし、まねびやるべき方なし。かの須達長者の祇園精舍造りけむもかくやありけむと見ゆるを、冬の室、夏の風各ことごととなり。

かかる御勢にそへて、入道させ給ひて後は、いとど勝らせ給へ

体が

りと見えさせ給ふにも、なほなべてならざりける御有様かなと、近く見奉る人はたふとみ、遠う見奉る人は遙に拜みまゐらす。今はこの御堂のあたりの木草ともならむと思へる人のみ多かり。そなたざまに趣けば、海の浪も柔に立ちて、この御堂の物をもて運ばせ、河も水すみて快く浮べもてまゐると見ゆ。〔榮華物語による〕

### 二二 社會的意識

我我は我我の子孫と共に、同一細胞の分裂に由りて生じた者である。生物は全種屬を通じて、同一の生物と見ることができる。生物學者は今日「生物は死せず」といつて居る。意識生活に就いて見てもその通である。人間が共同生活を營む處には、必ず各人の意識を統一する社會的意識といふものがある。言語、風俗、習慣、制度、法律、宗教、文學等はすべてこの社會的意識の現象である。我我の箇人的意識

Heffding グヘッ  
フ  
デ  
イン

はこの中に發生し、この中に養成されたもので、この大いなる意識を構成する一細胞に過ぎない。知識も、道徳も、趣味も、すべて社會的意義をもつて居る。最も普遍的なる學問すらも社會的因襲を脱しない。今日各國に學風といふものがあるのはこれが爲である。所謂箇人の特性といふものは、この社會的意識といふ基礎の上に現れ來る多様な變化に過ぎない。いかに奇抜なる天才でも、この社會的意識の範圍を脱することはできぬ。反つてそれらの天才家は社會的意識の深大なる意義を發揮した人である。眞に社會的意識と何等の關係なきものは狂人の意識の如きものにすぎぬ。

右の如き事實は誰も拒むことはできぬが、さてこの共同的意識といふものが、箇人的意識と同一の意味に於いて存在するもので、一の人格と見ることが出来るか否かに至つては種種の異論がある。ヘッフディングなどは、統一的意識の實存を否定し、森は木の集

合で、これを分てば森といふものがない。社會も箇人の集合で、箇人の外に社會といふ獨立なる存在はないといつて居る。然し分析した上で統一が實在せぬから統一がないとはいはれぬ。箇人の意識でも、これを分析すれば別に統一的自己といふものは見出されない。然し統一の上の一の特色があつて、種種の現象はこの統一によつて成立するものと見做されねばならぬから、一の生きた實在と看做するのである。社會的意識も同一の理由によつて一つの生きた實在と見ることが出来る。社會的意識にも箇人的意識と同じ様に中心もある、連絡もある、立派に一の體系がある。唯箇人的意識には肉體といふ一の基礎がある。これは社會的意識と異なる點であるが、腦といふものも決して單純な物體ではなく、細胞の集合である。社會が箇人といふ細胞によつて成つて居ると違ふ所はない。かく社會的意識といふものがあつて、我々の箇人的意識はその

一部であるから、我々の要求の大部分はすべて社會的である。若し我々の慾望の中より、その他愛的要素を去つたならば、殆ど何物も残らない位である。我々の生命慾も、主なる原因は他愛にあるを以て見ても明である。我々は自己の満足よりも反つて自己の愛する者、又は自己の屬する社會の満足に由つて満足されるのである。元來我々の自己の中心は箇體のうちに限られたものではない。母の自己は子のうちであり、忠臣の自己は君主のうちにある。自分の人格が偉大となるに従つて、自己の要求が社會的となつてくるのである。

今少し社會的改善の階級に就いて述べよう。社會的意識に種種の階級がある。その中最少であつて直接なものは家族である。家族とは我々の人格が社會に發展する最初の階級といはねばならぬ。男女相合して一家族を成すの目的は、單に子孫を遺すといふより

も、一層深遠なる精神的目的をもつて居る。人類といふ典型より見たならば、箇人的男女は完全なる人でない。男女を合した者が完全なる一人である。男子の性格が人類の完全なる典型でないやうに、女子の性格も完全なる典型ではあるまい。男女の兩性が相補うて完全なる人格の發展ができるのである。

然し我々の社會的意識の發達は、家族といふやうな小團體の中にかざられたものではない。我々の精神的並に物質的生活は、すべてそれぞれの社會的團結に於いて發達することが出来るのである。家族に次いで我々の意識活動の全體を統一し、一人格の發現とも看做すべきものは國家である。國家の目的に就いては色色の説がある。或人は國家の本體を主權の威力に置き、その目的は單に、外は敵を防ぎ、内は國民相互の間の生命財産を保護するにあると考へて居る。又或人は國家の本體を箇人の上に置き、その目的は單に

擔取階級  
2  
ラス  
人

箇人の人格發展の調和にあると考へて居る。然し國家の眞正なる目的は第一の論者のいふやうな物質的で又消極的なものでなく、又第二の論者のいふやうに箇人の人格が國家の基礎でもない。我の箇人は反つて一社會の細胞として發達し來つたものである。國家の本體は我の精神の根柢である、共同的意識の發現である。我は國家に於いて人格の大なる發展を遂げることが出来るのである。國家は統一した一の人格であつて、國家の制度、法律はかくの如き共同意識の意志の發現である。我々が國家の爲に盡すのは偉大なる人格の發展完成の爲である。又國家が人を罰するのは復讐の爲でもなく、又社會安寧の爲でもない。人格に犯すべからざる威嚴がある爲である。

國家は今日の處では統一した共同的意識の最も偉大なる發現であるが、我々の人格的發現は此處にとどまることは出来ない。尙

Polo ポウロ

派 ストイック學

倫理宗教を中心とし、窮理よりも實踐を重んじ、克己主義、世界主義を取るもの。西暦前の四世紀末ゼノンの創唱。希臘羅馬に勢力ありたり。

西田幾多郎

哲學者。文學博士。京都帝國大學教授。

孔子

一層大いなる者を要求する。それは即ち人類を打して一團とした人類社會の團結である。かくの如き理想は已にポウロの基督教に於いて、又ストイック學派に於いて現れて居る。只この理想は容易に實現はできぬ。今日はなほ武裝的平和の時代である。

遠き歴史の初から人類發達の迹をたどつて見ると、國家といふものは人類最終の目的ではない。人類の發展には一貫の意味目的があつて、國家は各その一部の使命を充す爲に興亡盛衰するものであるらしい。然し眞正の世界主義といふは、各國家が無くなるといふ意味ではない。各國家が益強固となつて各自の特徴を發揮し世界の歴史に貢獻する意味である。(西田幾多郎「善の研究」)

### 一四 孔子とその徒

孔子は愉快げに一座を見まはした。

周の聖人。名は丘、字は仲尼。西暦前五一年―前四七九年。

子路 姓は仲、名は由、子路はその字。孔門十哲の一。西暦前五四三年―前四八〇年。

曾皙 名は點、曾參の父。

冉有 名は求、有はその字。孔門十哲の一。西暦前五二二年。

公西華 名は赤、西華はその字。

其處には子路と曾皙と冉有と公西華との四人の者が靜に坐つてゐた。隔無い師弟の間に醸されるなごやかな空氣は室一杯に満ちて居た。

「今日はお互に遠慮拔にして、一つ楽しく語らうではないか。」

孔子は微笑を含みながら、改めて一座を見渡した。

「其許達はね、いつも世間から認めてくれぬ認めてくれぬ」というて愚痴をこぼしてゐるが、若し假に誰か其許達を認めて任用しようといふ者があつたら、どんな事をしようと思ふかな。」

「私の抱負を申して見ませうか。」

いつも出すぎ者の子路は、孔子の言葉の終るのを待ちかねたやうに、臆面も無く元氣よく切り出した。

「ああ、聴きませうとも。」

孔子はにこやかに子路の方へ顔を向けた。

千乗の國 大諸侯の國をいふ。方三百六十里にして、兵車千乗を出す國。

子路曾皙冉有公西華侍坐。子曰。吾日長于爾。母也。居也。不吾知也。如或知爾。則何以哉。子路平爾而對曰。千乘之國。攝乎大國之間。加之以師旅。加之饑饉。用也。當此之時。見獄則則。求罪則諾。無所避也。夫子哂之。

「まあ千乗の國ですな。それも列強國の間に介まれて、兩方から絶えず壓迫を受け、その上常に戦争に苦みもう一つおまけに饑饉續といふやうな慘憺たる國ですな。さうした國の政治を私の手に委ねられましたら、三年の間には見違へるやうな立派な國に仕上げ、御覽に入れます。人民は皆皆勇んで戰場に立つやうになるし、國民の道義心も高まつて、今まで壓迫してゐた周圍の國も辟易する程な整つた國に致して見ませう。」

「ほう、それはそれは。」

勝ち誇つたやうな子路の姿を見やりながら、孔子は思はず軽く笑つた。

「求や、其許はどうぢやな。」

「左様でございます。まあ五六十里四方か、せめて六七十里四方の小さい國を治めさして頂きましたら、三年位遣つてゐます間には、

求爾何如  
 子曰方之也  
 如五十年求也為  
 之比及三年可使  
 足民如其禮樂  
 以俟君子  
 赤爾何如  
 子曰非日能之願  
 學焉宗廟之事  
 如會同端章甫  
 願為小相焉

その國の經濟情態を安定させまして、國民達が安樂に生活出来る程度位には出來ようかと存じます。然し、禮義音樂といふやうな國民の文化方面まで向上させるなどといふことは、私の力には及びません。その方面は然るべき人の力を借りるより致方がございません。

「成程なでは赤はどう考へるな」

「私でございますか。いや私にはとてもそんな大した力は御座いません。出來ませんことは無論承知ですが、稽古のつもりで遣つて見たいと思ひますることは」

「ふむ」

孔子は何ものかを期待するやうに軽く合槌を打つた。

「宗廟のお祭とか、或は諸侯方の會見の際とか、さういふ晴の儀式にふさはしい禮装を致しまして、其等の儀式のささやかな助手

として、諸侯方をお輔して見たいと存じます。無論重だつたお助などは出來さうにも思へません」

公西華は遠慮勝につつましくかう答へた。

曾皙は先程から問答の邪魔にならぬ程に、軽く琴を弾きながら、他の弟子達のいふことを聞いてゐたが、問答に心を取られて、琴の手は留守になり勝であつた。

「點よ、其許の考はどうかな」

孔子は曾皙の方へ目を向けて答を促した。

曾皙はほらりと弾きすてて琴を措くと、靜に起ち上り、恭しく一禮をして置いて

「私の願は皆さんと少し趣が違ひますので……」

躊躇して後をいひ溢つた。

「よいではないか、何も遠慮はいらぬことぢや。唯お互に思ふこと

三子出曾皙後  
 曾皙曰夫三子者之  
 言何如  
 子曰亦各言其志也  
 曰夫予何陋由也  
 曰為國以禮其言  
 不讓是故陋之

をいひ合ふだけの事ぢやもの、いうて御覽。  
 「そんなら申し上げます。さやう暮春にはもう更衣の用意も整う  
 て、身輕ないでたちで、五六人の若者と七八人の子供でも連れて  
 あの沂水の邊をぶらぶら散歩して、のんびりと温泉にでも這入  
 りまして、和やかな陽を浴びながら、また晩春の野を辿りませう。  
 さうしてうつすり汗ばんだ身體に、祭壇の森の木蔭で一風いれ  
 て、聖者の徳を頌へた歌でもうたひながら悠悠家路へ歸りたい  
 ものです。いや埒もない願でございます。」  
 かう答へた曾皙の顔には、あの春の陽を見るやうななごやかな思  
 が溢れてゐた。  
 孔子は曾皙の言葉を聽き終ると、心の底から感歎したやうに、  
 「結構ぢやな、結構ぢやな。俺は其許の仲間入がしたいものぢや。」  
 さも満足げに孔子は更に一座を見まはした。

三人の弟子達はそれぞれ孔子の座下から退いて、後には曾皙一  
 人が残つてゐた。

「先生、あの三人の人達の申し上げた考はいかがでございますか  
 な。」

曾皙は孔子の心を探るやうに訊ねた。

「なに、皆それぞれ自分の思ふことをいひ合つたまでぢや。」

「でも先生はさつき由の申したことをお晒ひになりましたが、あ  
 れはどういふ譯でござりますか。」

「はははは、あれか。」

孔子は面白さうに又微笑した。

「あれはね、一體國を治めるには禮讓といふ事が大切ぢや。治める  
 者は謙讓で無ければならぬのぢや。ところが肝腎な國を治める  
 といふ由の言方が、其許も聞いてゐたらうが、如何にも不遜な言



安藤圓秀  
漢學者。東京  
帝國大學助教  
抄。

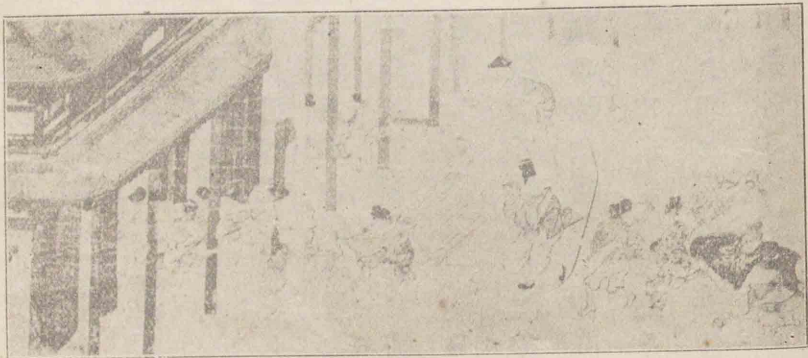
方であつたから、それで晒つたのぢや。あれが由の癖ぢやよ。

(安藤圓秀—孔子とその徒)

### 一五 わが國の繪畫

日本畫と西洋畫とは漸次混融して、その區劃も明瞭ならざるに至るが如しといへども、この兩者の純粹なるものを比較すれば、各自の特色はなほ甚だ顯著なり。ただに絹紙と彩具との相違のみならずや。その用意、筆法等において皆然り。かれにあつては、藝術は科學と並行し、理性は想像の衝となりて、遠近、明暗力めて自然に背かざらんことを期し、これにあつては、文化の精神的方面獨まづ進み、筆を揮ふもの、感興に乗じて心裏の印象を寫し出す。かれは色彩を旨とし、これは描線を重んじ、かれは實相のとほりに空氣の色をも漏すことなく、これは主體の外は生地のままに存す。一は濃艶、一は

瀟洒、一は輪奐たる樓臺に顯官が客を延くが如く、一は幽閑なる茅屋に高士が梅を愛するに似たり。これらの差別は、蓋しその初よりして然りしにあらず。各自獨立したる歴史が漸次に養成したるものにして、今はた兩洋交通の歴史によりてこれを合一せんとする傾向あるなり。  
わが國の文藝における佛教の感化の甚深なることは多言を要せず。眞の美術の歴史といふは聖德太子の佛教興隆に始り、爾來進歩劇甚、以て偉大なる奈良時代に及べり。されどこの時代も彫塑においてこそ千古無比の名を博すべけれ、繪



大伴 納言 繪卷

巨勢金岡  
畫家巨勢家の  
祖。清和天皇  
以下五朝に歴  
仕し、大納言  
に至る。

鳳凰堂  
京都府宇治の  
平等院の佛  
殿。藤原頼通  
の創建。今特  
別保護建造  
物。  
類伽  
梵語迦陵頻伽  
の略。妙聲鳥  
と譯す。雅樂  
にこの曲名あ  
り。

畫の歩調はいまだこれに伴はず。平安時代に巨勢金岡が出でし頃より、漸く丹青全盛の世は來れるなり。而して奈良時代の彫塑がなべて佛像なるが如く、平安時代の繪畫も概して佛畫の外に出でず。按ふに、平安時代の如く形式美を偏重したる時代は、他に類例を見ず。佛敎も亦形相の具足によりて内心の信仰に近づくべしとしたり。法成寺、法勝寺の如き今廢墟をだに存せざれども、金堂、講堂、七寶莊嚴、天を摩する大塔、虹を曳く廻廊、すべて一代の工を盡しし情態は歴史の傳ふるところ、今に存する鳳凰堂を見てもその一端を覗ふべし。香煙徐に薫じて幢幡を掠め、蓮華頻に散つて轉讀にたぐふ龍頭の舟は池上に浮んで、笙鼓月に冴え、類伽の袖は庭前に翻りて、舞容風に堪へず、恰もこれ坐ながらなる極樂淨土、紫雲の來迎を待たずして身は既に汚濁世界を離る。かくの如き場に用ゐる畫像なれば、彩華炫耀、丹碧映射、その色は珊瑚、水晶を碎き、その線は黄金の箔を切り、或は慈悲圓滿、或は忿怒破邪、十分に濃く、あくまで鮮に、精を窮め、微を闡きて、後世の乾枯灑脫なるものとは全く選を異にしたること想見するに足る。

平治物語繪詞  
現存するもの  
三卷。畫は住  
吉慶恩、書は  
藤原家隆なり  
といふ。  
圓光大師畫傳  
四十八卷。畫  
は土佐派の手  
になり、書は  
伏見院その他  
數人の寄合畫  
なり。知照院  
と、當麻寺と  
の二本あり  
雪舟  
名は等楊。俗  
姓小田氏。備  
中赤濱の人。  
寛正中明に入  
り、歸朝後周

鎌倉時代の繪卷物もまた日本繪畫の精華なり。平治物語繪詞等は源平鬭争の慘狀を寫し、圓光大師畫傳等は新佛敎勃興の機運を描く。いづれも時代の反映にして、又不朽の逸品たるを失はざれども、内容、外形、共に根本の變化を受けたるは實に東山時代の繪畫にして、僧雪舟等の筆その代表たり。この革新は禪宗の提撕によりて成り、鎌倉時代にこの宗の傳來せしより、漸く養ひ來れる勢力のここに頂點に達したるものにして、香茶の技と榮枯を共にせり。そもも平安時代の佛寺を去つて禪刹の門をくぐるや、彼此別天地の感なくんばあらず。結跏趺坐して寂靜の境に入れば、物の美醜も眼を遮らず。一旦その道に悟入すれば、經典、佛像何の要かあらん。教外

防の雲谷寺、石見の大喜庵に居る。永正三年二月寂す。(二〇八〇年—二一六六年)

別傳といひ、以心傳心といひ、精神を主として形體に泥まず。例へば能樂に何等の背景を設けずしてしかも能く雲煙萬里の情趣を偲ばしむるが如し。繪畫もこれに同じく、色を棄てて筆に託し、巧を抛ちて氣を驅り、蒼枯にして恬澹、破墨一掃して遠山を産み、秃筆數行



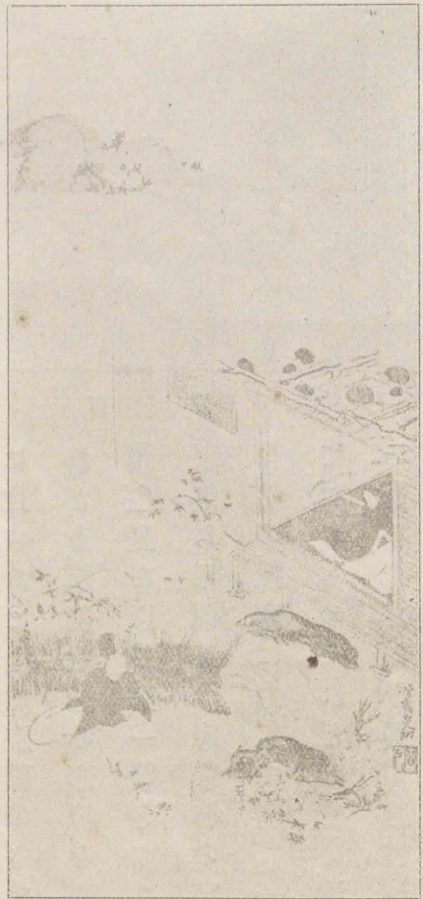
筆舟雪

にして樹石を刻む。一見すれば兒戲、熟視すれば神工、益味うて益趣あり。恍惚としてわれ我を忘る。即ちこれ東山時代の特色にして、流風餘韻延いて近代に及べり。

光琳  
尾形氏。名は方況、通稱雁金屋藤重郎。京都の人。享保元年六月歿す。(二三二一年—二三六一年)

一蝶  
英一蝶といふ。大阪の人。當世百人一首を著し、時事を諷るに坐し三宅島に流さる。享保九年正月歿す。(二三二一年—二三八四年)  
菱川師宣  
安房の人。友竹と號す。(二二九八年—二三七四年)  
大雅  
池野氏。名は無名、通稱秋

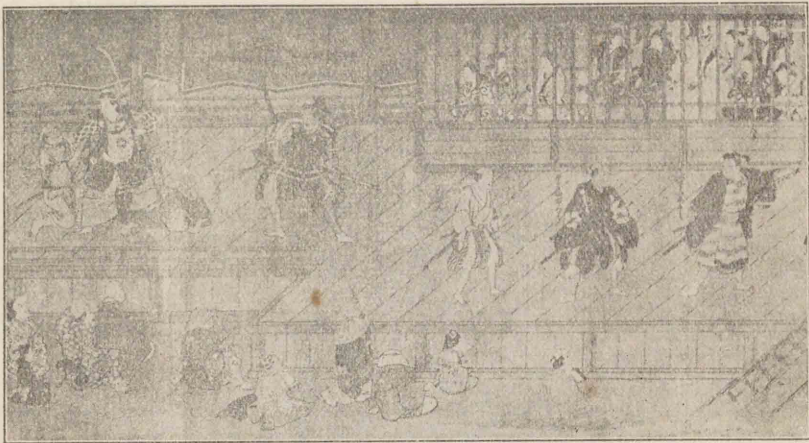
桃山時代は、豪華の氣一世を蓋ひ、繪畫もやや移りて雄大穠麗の風を喜べども、いまだ東山の根據を衝くに及ばざりき。江戸時代に至つて、幕府が消極の方針は、更にその規模を縮めて枯淡の域に歸



筆琳光

らしめ、門閥の貴に誇れる狩野、住吉も先人の糟粕を嘗むるのみ。元祿の盛時には、裝飾に傾ける光琳、滑稽の才ある一蝶あり、菱川師宣以來の浮世繪が時勢粧を寫して、山水、花鳥以外に題目を求めたる

平。京都の人。安永五年四月歿す。(二三八三年—二四三六年)  
 應舉  
 圓山氏。通稱主水。丹波の人。京都に住す。寛政七年七月歿す。(二三九三年—二四五五年)  
 訥言  
 田中氏。名は癡。京都の人。法橋に敘せらる。文政六年明を失し、絶食數日、舌を嚙みて死す。(一二四八年)  
 容齋  
 菊池氏。名は武保。通稱量平。多く内朝忠孝の士を畫す。



師  
 は最も注意すべしと雖も、鄙俗に流れて遂に高尚なる趣味に應ずる能はず。大雅等の文人畫は、東山の繪畫に比するに全然別種のものに屬すれども、匠氣を忌み形似を疎にし、氣韻生動を以て第一義とするところ  
 宣  
 は即ち相似たり。應舉等の寫生畫は自然の模寫に力めて別に一流を立てたるものなれども、また清淡洒脱の習を脱するを得ず。訥言が一生面を開きたる土佐古風容齋が好みて畫きし歴史畫の如きは、即ち學界における國學の興隆に齊しくまた時

シテ主人  
 ワキ副主人

く。明治十一年六月歿す。(二四四八年—二五三八年)  
 藤岡作太郎  
 國文學者。文學博士。東國と號す。金澤の人。第三高等學校教授、後東京帝國大學文科大學助教授となり、明治十三年二月歿す。(二五三〇年—二五七〇年)  
 シテ天人  
 ワキ白龍  
 ワキツレ漁夫  
 風早の云云  
 萬葉集に「風早の三保の浦曲を漕ぐ舟の、舟人さわぐ浪立つらしも」。

勢の反響なり。但これはかれの如き價值なきを憾とするのみ。一派また一派各盛衰の數を免れざりしが、いまだその間に崛起して斯道の根本的革新に成功せるものなくかかるうちに明治の昭代は來れるなり。(藤岡作太郎)

### 一六 羽衣

ワキ一歴「風早の三保の浦曲を漕ぐ船の、浦人さわぐ浪路かな。  
 ワキ、サシ語「これは三保の松原に白龍と申す漁夫にて候ふ。ワキツレ萬里の好山に雲乍ち起り一樓の明月に雨初めて晴れたりげにのどかなる時しもや、春のけしき松原の浪立ちつづく朝霞、月ものこりの天の原、及なき身のながめにも、心空なるけしきかな。歟、忘れめや、山路をわけてきよ見瀾、はるかに三保の松原に、たちつれいざや通はん。風向ふ雲のうき浪たつと見て、釣せて人や歸るらん。待てしは

萬里の好山に  
云云  
詩人玉屑に、  
「千里好山雲  
乍凝一樓明  
月雨初晴」  
風向ふ云云  
冷泉爲相の歌  
に「風向ふ雲  
の浮葉立つと  
見て釣せぬ先  
に歸る舟人」



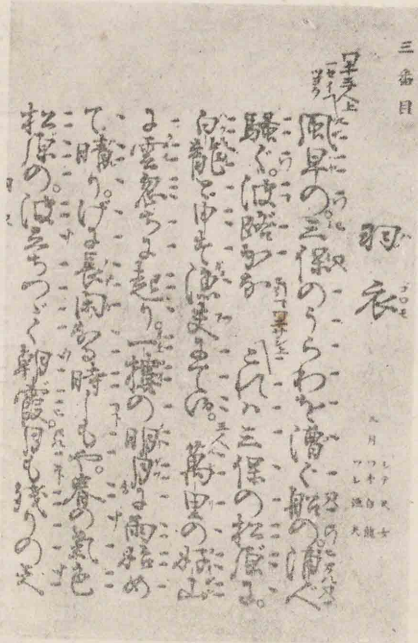
三保の松原の羽衣松

シテ詞それは天人の羽衣とて、たやすく人間に與ふべき物にあらず。

し、春ならば、吹くものどけき朝風の、松は常磐の聲ぞかし。浪は音なき朝なぎに、釣人おほき小舟かな。ワキ詞われ三保の松原にあがり、浦のけしきをながむる所に、虚空に花ふり、音楽きこえ、靈香四方に薫ず。これただごとと思はぬ所に、これなる松に、うつくしき衣かかれり。よりに見れば、色香妙にして常の衣にあらず。いかさま取りて歸り、古き人にも見せ、家の寶となさばやと存じ候ふ。

シテ詞「なう、その衣はこなたのにて候ふ。何しに召され候ふぞ。ワキ詞「これは拾ひたる衣にて候ふ程に、取りて歸り候ふよ。」

元の如くにおき給へ。ワキ詞「そもこの衣の御主とは、さては天人にてましますかや。さもあらば、末世の奇特にとどめおき、國の寶となすべきなり。衣を返す事あるまじ。シテ詞「悲しやな、羽衣なくては飛行の



みちも絶え、天上に還らんことも叶ふまじ。ざりとては返したび給へ。ワキ詞「この御詞をきくよりも、いよいよ白龍力を得、謠もとよりこの身は心なき、天の羽衣取り隠し、謠叶ふまじとて

立ちのけば、シテ謠「今はさながら天人も、羽なき鳥の如くにて、あがらんとすれば衣なし。ワキ詞地にまた住めば下界なり、シテ謠」とやあらん、かくやあらんとかなしめど、ワキ謠「白龍衣を返さねば、シテ謠力およば

天人の五衰  
天衆が命終の時、五つの死滅の異相を生ずるをいふ。その中に頭上華萎の相あり。

天の原の歌  
丹後風土記に出づ。

ず、ワキ地謡せんかたも、地謡涙の露の玉鬢、かざしの花もしをしをと、天人の五衰も、目の前に見えてあさましや。

シテ天の原ふりさけ見れば霞立つ、雲路までひてゆくへしらずも。地謡すみ馴れし、空にいつしかゆく雲の、うらやましきけしきかな。迦陵頻伽のなれなれし、聲今さらにわづかなる、雁がねの歸りゆく天路を聞けばなつかしや。千鳥鷗の沖つ浪、行くか歸るか春風の空に吹くまでなつかしや。

ワキ調いかに申し候ふ。御姿を見たてまつれば、あまりに御痛しく候ふほどに、衣を返し申さうずるにて候ふ。シテ調あらうれしや。こなたへ賜り候へ。ワキ調しばらく承り及びたる天人の舞樂、ただ今ここに奏し給はば、衣を返し申すべし。シテ調うれしや。さては天上に還らん事を得たり。このよろこびに、とてもさらば、人間の御遊のかたみの舞、月宮をめぐらす舞曲あり。唯今ここに奏しつつ、世のうき

人に傳ふべし。さりながら、衣なくては叶ふまじ。さりとはまづ返し給へ。ワキ調いや、この衣を返しなば、舞曲をなさでその儘に、天にやあがり給ふべき。シテ調いや、疑は人間にあり。天に偽なきものを。ワキ調「あらはづかしや。さらばとて、羽衣を返し與ふれば、シテ調少女は衣を著しつつ、霓裳羽衣の曲をなし、ワキ調天の羽衣風に和し、シテ調雨にうるほふ花の袖、ワキ調一曲をかなで、シテ調舞ふとかや。地謡東遊の駿河舞、この時や始なるらん。

ワキ調それ久かたのあめといつは、二神出世のいにしへ、十方世界をさだめしに、空はかぎりも無ければとて、久かたの空とは名附けたり。シテ調然るに、月宮殿のありさま、玉斧の修理とこしなへにして、地謡白衣、黒衣の天人の敷を、三五にわかつて、一月夜夜のあま少女、奉仕を定め役をなす。シテ調我も敷ある天少女、地謡月のかつらの身をわけて、かりに東の駿河舞、世につたへたる曲とかや。ワキ調春

二神  
伊弉諾、伊弉册の二尊。  
十方  
東西南北乾坤  
異長上下。

春霞云云  
 後撰集、紀貫之、春霞たなびきにけり久方の月の桂も花や咲くらむ。  
 天津風云云  
 古今集、僧正遍昭、天津風雲のかよひち吹きとちよ少女の姿しはしとどめむ。  
 君が代は云云  
 拾遺集、贈人不知、君が代は天の羽衣まれにきて撫づともつきぬ巖なるらむ。  
 蘇命路の山  
 須彌山ともいふ。佛經に出づ。

霞たなびきにけり久かたの月のかつらも花や咲くげに花かづら  
 色めくは、春のしるしかや。おもしろや天ならで、こころも妙なり天津  
 風、雲の通ひぢ吹きとちよ。少女の姿しはしとどまりて、この松原の  
 春のいろを三保がさき、月清みがた、富士の雪、いづれや春の曙、たぐ  
 ひ浪も、松風も、のどかなる浦のありさま。その上天地は、何を隔てん  
 玉垣の、内外の神の御するにて、月も曇らぬ日の本や。君が代は、  
 天の羽衣まれにきて、地盤撫づとも盡きぬ巖ぞと、聞くも妙なり東  
 歌、聲そへてかづかずの、笙、笛、琴、篳篥、孤雲の外に充ち満ちて、落日の  
 紅は、蘇命路の山をうつして、緑は、浪に浮島が、はらふ嵐に花ふりて、  
 げに雪をめぐらす白雲の袖ぞ妙なる。南無歸命月天子、本地大  
 勢至。地盤、東遊の舞の曲、あるひは天つみ空の緑の衣、又は春  
 立つ霞の衣、色香も妙なり少女の裳裾、左右左、さいう颯颯  
 の、花をかざしの天の羽袖、靡くもかへすも舞の袖。東遊のか

ずかずに、その名も月の宮人は、三五夜中のそらに又、満願真如の影  
 となり、御願圓滿、國土成就、七寶充滿の寶をふらし、國土にこれを施  
 し給ふ。さる程に時移つて、天の羽衣浦風に、たなびきたなびく三保  
 の松原、浮島が雲の、あしたか山や富士の高嶺、かすかになりて、天つ  
 み空の霞に紛れて失せにけり。  
 (觀世流謠曲)

### 一七 朝鮮の美術

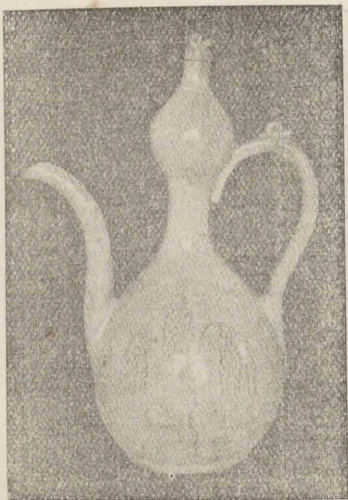
私は朝鮮の藝術、特にその要素とも見られる線の美は、實に彼等  
 が愛に飢ゑた心のシムボルであると思ふのである。美しく長く長  
 く引く朝鮮の藝術の「線」は、實に連連として訴へる心そのものであ  
 る。彼等の怨も、彼等の祈も、彼等の求も、彼等の涙も、その線をつたつ  
 て流れるやうに感ぜられる。一佛像を想ひ浮べても又一陶器を擇  
 んでも、吾吾はこの朝鮮の線に觸れない場合はない。涙にあふれる

Symbol シムボル  
 象徴。

諸の訴がこの線に託せられてゐる。彼等はその寂しい心持と、何も  
 のかに懐れる苦の情とを、美しくも又ふさはしくも、それ等の長く  
 たをやかな線に含めたのである。強大な泰然とした支那の藝術の  
 「形の美の前に、その線の美は實によりき對比であらう。彼等は美しさ  
 に寂しみを語り、寂しみに美しさを含めたのである。追迫せられ、抑  
 壓せられた彼等の運命は、止むなく寂しみと懐れとに慰めの世を  
 求めたのである。悲母の観音は彼等の靈の慰めであつた。優しく柔  
 な高麗の磁器は日日の楽しい友であつた。余はその藝術を想ふ毎  
 に、にじみ出る涙を想はない時はない。それ等の製作者が何を求め、  
 何を現さうとしたかを知るものは、愛の心を彼等に贈らずにはあ  
 られぬであらう。弱さを嘲る事が何の誇となり得よう。彼等の寂し  
 さは心の底から滲み出てゐる。それは切な生命の聲であつた。かか  
 る経験がその藝術を永遠のものにし、その作品を永劫の美に導い

たのである。

種々な醜い出来事の中に在つて、幸にも吾吾の或者は美を理解  
 し、眞を理解しようとして努めてゐる。然し藝術的意識がつよまつて來



朝鮮美術品

た今日、不思議にも一つの美の世  
 界が吾吾の傍にあるのを見逃し  
 てゐる。却つて人情を異にし、國を  
 隔てた西歐の藝術に對しては、誰  
 も明な概念を持つてゐるやうに  
 見えるが、血を交へ氣質を同じく

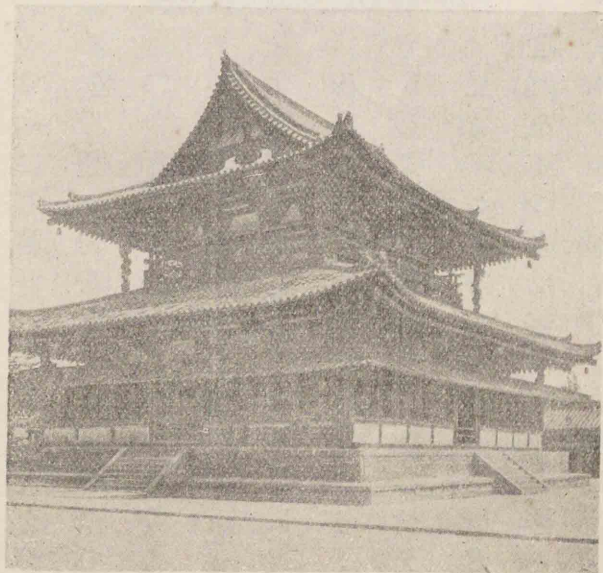
する朝鮮の藝術に就いて、明な理解を持つ人は非常に少い。否、こ  
 には殆ど何物も無いかの様にさへ考へてゐる。

然し朝鮮がその藝術によつて、卓越した位置を東洋文化の中に  
 認められる日は間もなく來るであらう。何故今日までそれが一般



から見棄てられてゐたのであらうか。美に對しては鋭敏であると自らも思ふ吾吾が、わけても吾吾に近い民族の藝術に就いて、殆ど何等の意識をも持たないといふのは如何なるわけであらうか。遠い外國の人人に、朝鮮が「隱者の國」として永く封ぜられてゐたのは止むを得ないであらう。然し交通の容易な吾吾の間に、それが失念せられてゐるのはむしろ奇異な現象ではないか。

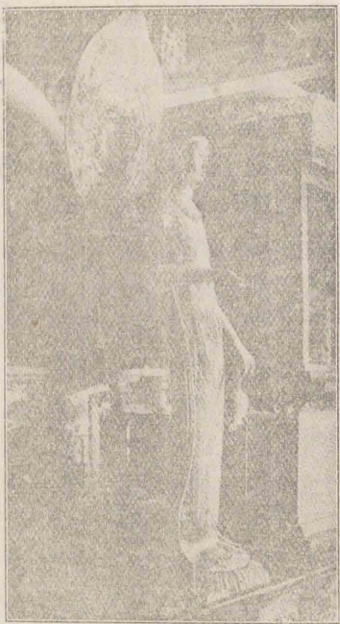
朝鮮の藝術に對して、殆どその價値を意識しない吾吾の心理情態には非常な矛盾があると



法隆寺金堂

法隆寺  
法相宗の大本  
山。奈良縣生  
駒郡法隆寺

まぎれもない事實である。



百濟觀音

例へば法隆寺の金堂を飾る最も優秀な佛像は、今「百濟觀音」と呼ばれてゐるではないか。長く祕傳せられた夢殿に在る同じ觀音の立像も、その様式からしても、美からしても、まぎれもない朝鮮の作

すべては、實に朝鮮の民族によつて作られたのではないか。これに次いで支那のものが多いことは今更いふを俟たぬ。これは史家も實證する

村にあり。推古天皇十五年聖德太子の創建。建築諸佛像等上古美術の好典範たり。

中宮寺

同村にあり。推古天皇十五年聖德太子の創建。

廣隆寺

眞言宗古義派の本山。京都府葛野郡太秦村にあり。推古天皇十一年秦河勝の創建。

正倉院

東大寺大佛殿の北にあり。

品ではないか。中宮寺や、廣隆寺に保存せられてゐるあの美しい物おもひがちな彌勒の半跏像も、様式は支那に起因しても、恐らく朝鮮から傳來したものであらう。日本に渡つたものの中で最も美しいものの一つである玉蟲の厨子は、朝鮮の名譽をこそ永遠に傳へるであらう。

工藝品に至れば殆ど列擧するに暇がないであらう。聖德太子千三百年祭の法會の折に、特に展覽せられた多くの御物、又は正倉院に傳藏せられてゐる種種なる古作品、それ等の物の大部分は恐らく朝鮮から傳へられたものであらう。比較的よく古法を保存してゐる朝鮮の作品には、それ等に類似する紋様や手法を今も尙見る事が出来る。嚴密に日本の國寶から、朝鮮の作品又はその遺風を傳へたものを除去してしまふならば、如何にそれは殘少く寂寞としたものになるであらう。かくする事は、あの卓越した推古朝の黄金

時代を日本史から抹殺する事ではないか。日本は朝鮮の美に飾られた日本である。若しもあの賢明な聖德太子が朝鮮の文化を受け容れなかつたとしたら、日本は誇るべき國寶の幾百を失つた事であらう。推古朝の文化を追憶する時、吾吾は朝鮮の文化を欽慕しつつあるのである。時間には推移があり、國情には變化があるのであらう。だが日本の文明が朝鮮の美に濫められて生まれたといふ史實こそは不變である。

しかも人は遠い過去の朝鮮にのみ藝術があり、文化があつたと思つてはならぬ。高麗の朝はその陶磁器に於いても既に不滅ではないか。その時代は學藝の時代であつた。あの精確な、立派な高麗版の大藏經より、より優れた佛典の編纂は、日支兩國を通じて一つもないではないか。末期であるといつて多く省みられない李朝に於いても、私は不滅な作品を幾度も目撃した。その木工品や、磁器の或

物は眞に永遠である。あの日本の茶器が、屢南朝鮮に於いて作られた日常の器の遺韻を傳へたものであるのを、誰も知つてゐるであらう。

私のやうな史學を専攻としない者にでも、是等のことが氣附かれてゐる。若し正當な歴史家が出て來るならば、彼は彼の「朝鮮美術史」に於いて、一つの驚愕を世界に寄與する事が出來るであらう。

(柳宗悅「朝鮮とその藝術」)

柳宗悅  
文學者。東洋  
學教授。東  
京の人。學習  
院出身。明治  
二十二年三月  
生まる。

## 一八 清文私評

### 一、春は曙

春は曙。やうやうしろくなりゆく山ぎはすこしあかりて、紫だちたる雲のほそくたなびきたる。夏はよる。月の頃はさらなり、闇もなほ螢飛びちがひたる。雨などのふるさへをかし。秋は夕ぐれ。夕日は

なやかかにさして、山のはいと近くなりたるに、鳥のねどころへゆくとして、三つ、四つ、二つなど、飛びゆくさへあはれなり。まいて雁などのつらねたるが、いとちひさく見ゆるいとをかし。日入りはてて、風のおと、蟲のねなどいとあはれなり。冬はつとめて、雪のふりたるはいふべきにもあらず、霜などのいとしろく、又さらでもいと寒きに、火などいそぎおこして、炭もてわたるもいとつきづきし。晝になりてぬるくゆるびもてゆけば、炭櫃、火桶の火も白き灰がちになりぬるはわろし。

我我日本人ぐらゐ、自然さいふものに對しての深い憧憬をもつてゐる。民族は他に恐らくあるまい。我我の祖先の生活は自然に支配され、或は時に盲従してゐる。それ故我我の有する文學美術には、自然を對象としてその美を發揮することを努めたものが頗る多い。よし對象とせぬまでも、自然を背景とせぬものは殆ど

ない。だから、わが文學美術から自然を切り離して見ることは到底不可能なことである。かうした國民性をもつた我々の祖先が、動もすれば四季の風物をいひ、花鳥風月を歌つたのは蓋し當然である。

四季の風物に對しての好悪は、甚だ複雑な聯感が伴ふものであるが、直覺的には皮膚の刺戟に本づくことがその大部分であるから、春秋二季はことに快的な時節と認められ、つひにこの二季の優劣は人人の口頭語となり、詞人がその才藻をきそふ好題目となり、或は春に祖を入れたり、或は秋に心を寄せたりして、彫心鏤骨詩壇の一佳典を作るやうになつた。けれど、一派の詞人は、四季おのおの特色があり好處があることを認めて、頗る公平な見地からその推稱をおこたらなかつた。すなはち平等に四季の景趣を敍したのものには、この草子以前に空穂物語があり、同時に

春は花の香に咲く  
はかり物のあはれは秋ぞ  
まよひゆく  
ゆかり空を一つに  
かすみつおぼろに見ゆ  
春の夜の月

源氏物語があり、後世には徒然草がある。中にも傑出したのをこの文とする。蓋し清女一流の敏警な觀察と、引き締つた齒ぎれのよい筆致とは、とても他の眞似の出來ない妙所で、實にわが國文中の異彩である。

やはらかい輪郭を作つた東山の峯に、ほのぼのと別れてゆく横雲の空は、京うまれの清女が幼少から見馴れて、印象ふかく感じた景色であらう。また雨に對する厭惡の念が、今のわれわれの想像以上に強かつた當時において、雨などの降るさへをかすと道破したのは、よく時



清 少 納 言

代を超越して自然の趣味を解し得たものである。三つ四つ二つの辭様の參差は鳥のまばらに飛んでゆく状を形容し得ておもしろい。ちひさく見ゆるは雁が山とび越えて去來する光景で、京都の地勢上常にありがちなことである。稀にはひくく飛ぶこともあらうが、下文にも「雁の聲は遠く聞えたるをかし」といつてゐるのを見ると、それは清女の嗜好に適はなかつたものだらう。否恐らくは、近い雁に詩味を感得するほどの機會と經驗とをもたなかつたのだらうと推察される。火などいそぎおこすに寒氣を怖れた趣が現れてゐる。炭もてわたるは彼方此方の火桶、炭櫃に女官達が炭つぎまはる光景であらう。小大君集に

殿上に炭もてくる男をおそく参りたりとて藏人のとらへて、髮に繩をゆひ付けて宥さざりしかば、女房方よりよみてやる。

大原  
京都府愛宕  
郡。

おほはらや炭のかしらの繩ゆるせ

このめに涙うかぶといふなり。

これによると、當時の禁中御用の炭は、大原の炭竈からぢかに上納したものと見える。納入の時期がおくれたとて、その炭焼の長を折檻するのは甚しい亂暴のやうだが、まことに炭なしには片時も居られぬから仕方がない。天井はなし、大間ではあり、四方かけ拂ではあり、日あたりもとかく不十分な當時の殿舎では、寒さはさこそと想ひやられる。そこで火おこすも、炭もてわたるも、頗る有意味な譯となつて、つきづきしくもをかしくも、餘計に感ぜられるのである。

時刻を四季に配當して、その特色を紹介したこの企は空前の新案である。さて春は曙、夏はよる、秋は夕ぐれ、冬は早朝の四綱目がまづ出來て、次にその細説を試みるに當つて、春夏秋は専ら敘

景につとめ、冬には人事を配して内容に變化あらしめ、また春夏を輕輕に評し去つて、秋冬に力をそそぎ、また春夏秋は専らその好處をのみ擧げ、冬には「晝になりて——わろし」と抑損の轉語を下したなど、筆法が變化に富んでまことに面白い。しかも文の様式が整然として、その結構から、布置から一寸のたるみも無い。初學者の模範を取るには最も都合のよい文體の一つであらう。

殊に注意すべきは春の曙と秋の夕暮とである。この文が一度世に出てから、この二つは吟詠の好題目となつて、千載の今もなほ歌人の口の端に乗つてゐる。以てその觀察がただ奇警といふばかりでなく、極めて妥當であることが證明される。

二、過ぎにし方戀しきもの

枯れたる葵、ひひな遊の調度、二藍、えび染などのさいでの、おしべ、されて草子のなかにありけるを見つけたる。又折からあはれなり

し人の文、雨などのふりて徒然なる日さがしいでたる。こそのかはほり、月のあかき夜。

賀茂祭  
賀茂神社の祭。四月の中旬の酉の日に行ふ。葵祭ともいふ。近衛中將使に立ち、諸官警固し、威儀極めて壯大なりき。

賀茂祭は平安京第一の物見だから、その神事の象徴たる二葉葵は、祭過ぎても、年月が経つても、床しい物に取り扱はれて、それに就いた風流的話説は殆ど枚擧にたへない。當時の上流社會の雛遊は、今のお雛様のやうな飾附を常にやつてゐたらしい。源氏物語に雛の家の事があり、又齋宮女御集に、

ひひな遊に神のおもとに詣づる女に男出で會ひて物いひ  
などす。

おなじ雛社の前の川に紅葉のある所。

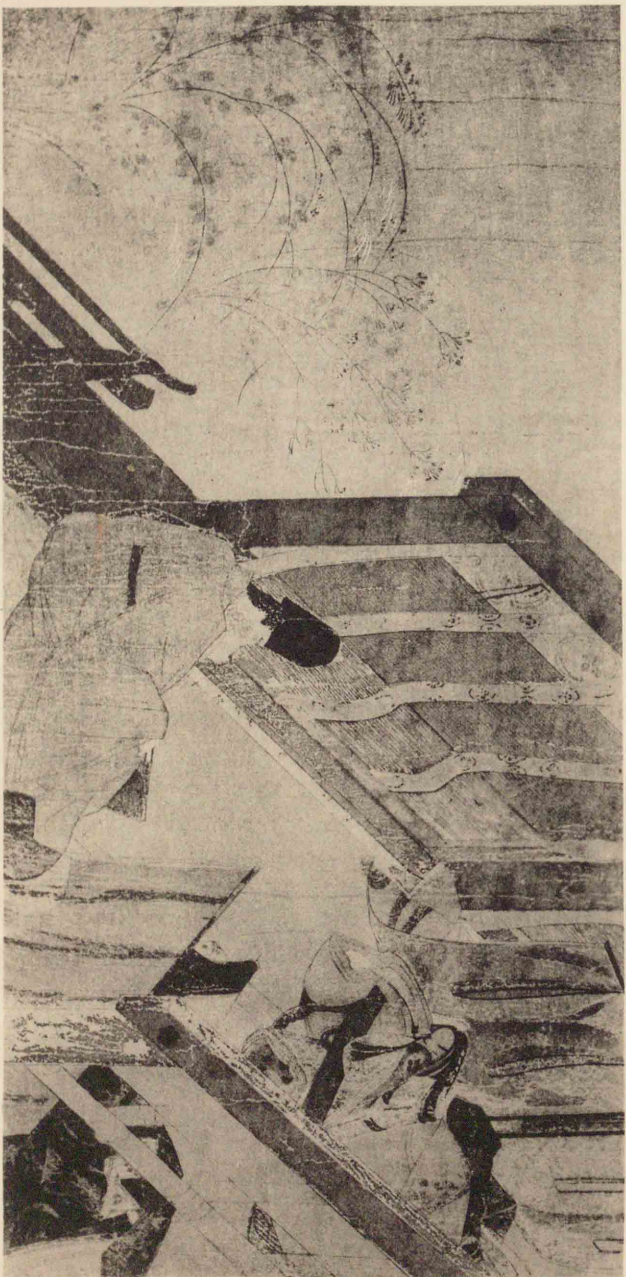
など見え、中大業なものだつた。随つて遺存する道具の眼に觸れるも多く、小兒の昔が懐しくもなる。さすが女の情である。裁切が草子の間にはさまるのは、女でなくては更に出會はぬ事件で、

ふと見附け出して、衣裳を新調した折柄をしのぶ、その事その情  
いづれも幽婉である。二藍、葡萄染は當時の人の好尚にかなつた  
色合であつた。それは紫を基礎色としたからである。人の文は徒  
然草にこれを潤色したのがある。兼好法師も同感と見えた。扇は  
折に觸れて新規につくるを興とした時代だから、古扇は昔をし  
のぶすがとなるのである。月に往事を思ふことは、文獻上では  
支那文學の將來した思想のやうであるが、元來どの民族でも固  
有してゐる感情だらうと思ふ。

この文、名詞止の雙頭で起り、おなじ雙尾で結び、中間また長句  
の中止法で對句を作つて、齊整簡約な體裁である。しかも内容は  
極めて柔い、なつかしい情調が往來してゐる。

三、あてなるもの

薄色に白がさねの汗衫、かりのこ、けづりひのあまづらに入りて



(筆能隆傳) 卷繪語物氏源

あたらしきかなまりに入りたる、すゐさうの數珠、藤の花、梅の花に雪のふりたる、いみじう美しきちごの覆盆子くひたる。

紅白淺紫の色彩に形相光澤の美が入りまじつて、一篇玉のやうな詩である。作者の心のひかりが透き徹つて見える。汗衫や藤の花はその紫色が頗る品よく感ぜられる。殊に平安人士の嗜好には深くかなつた色相で、單に濃い薄いといへば紫色のことである程に、一般的好尚となつてゐた。下文にも「紫は何も何もめでたし」といつてゐる。水晶の數珠、家鴨の卵の品のよいのは素よりのこと、金椀は銀で、梅はかならず紅梅でなくてはならぬ。さてこそ、氷も雪も調和が美しいのである。乳兒の覆盆子は紅梅の雪とおなじ配色の美であるが、「食ひたる」の一語に乳兒の愛らしげな動的の情致が籠つて見える。

今日の氷の甘露をさすとは反對に、削氷が甘葛に入るとある



ので、その氷の分量が少くつて貴かつたことが想像される。しかもこの甘葛が砂糖とはちがつてあまり甘心した物でもないが、大御酒参つて氷水召せば、その頃の「上流社會の大した奢であつた。」

四、香爐峯の雪

雪いと高く降りたるを、例ならず御格子まゐらせて、炭櫃に火おこして物語などして集り侍ふに、宮、少納言よ、香爐峯の雪はいかならむと仰せられければ、御格子あげさせて、御簾高く巻き上げたれば、笑はせ給ふ。人人も皆さる事は知り、歌などにさへうたへど、思ひこそ寄らざりつれ。人人、なほこの宮の人にはさるべきなめりといふ。

雪とさへいへば慄へながらもめでたがつた人達が、格子をおろして話し込んでゐたのは、蓋し異例である。中宮の「香爐峯の雪

宮  
一條天皇の皇  
后藤原定子。  
當時中宮。  
香爐峯の雪  
白氏文集に  
「遺愛寺鐘鼓  
枕聽、香爐峯  
雪撥簾看」。

は」の提唱は、格子をあげさせたく思し召しての御方便であつたらう。

公任  
大納言藤原公  
任。

香爐峯の句は菅公の名句、都府樓纒看瓦色、觀音寺只聽鐘聲の藍本として著名であり、公任もその朗詠集中に收めたほどで、當時誰知らぬ者もない。撥簾看は中宮の豫期して居られた歸結だが、只それを女房達がどんな鹽梅に扱ふか、どんな形式で發表するかに興味をもたれたのである。女房達の中には折角思ひ寄つても、氣の利いた御答が出来ないので躊躇した者もあらうが、清女の如く何もいはず、すつと起つて簾を捲き上げる態度に出ることは知らなかつた。これは單なる聯想だけで終るのではなく、更に體現して見せたのである。しかも咄嗟の仕事だけに、いよいよその敏慧さに驚かされる。清女が再三名聲を博したのは、文辭上、口舌上の才鋒であつたが、これは更に一步を進めた仕打であ

る。清女の手柄話は數ある中に、こればかり後世まで特に傳稱された所以もそこにある。

「然るべきなめり」が清女の才女なことを直接に保證すると同時に、「この宮の」が中宮の才學に勝れた御方であることを間接に保證してゐる。基俊の悦目抄に「香爐峯の雪は」を一條院の敕言とあるのは誤解である。（金子元臣—枕草子評釋）

基俊  
歌人。藤原氏、  
俊家の子。源  
俊頼と名を齊  
しうす。但才  
を恃みて倨傲  
なるを以て顯  
達せず。

### 一九 斷光錄

#### 一、苦痛の祕義

苦痛の刹那、人は往往黙して聖者となる。苦痛の前には一切の煩惱薄きこと霧の如く、眼中の山河大地も、幻の如くに漂ひ去らんとす。一念即一切、一切即一念は正しくこの境の光景なり。この時吾人は往往一種清涼の感を覺ゆることあり。

大いなる苦痛の刹那、人に誇るべき何ものありや、恃むべき何ものありや。その好む所は何ぞ、その願ふ所は何ぞ。彼はた何をか戀ひ慕ひ、何をか思ひ煩ひ、何をか恐れ惑ひ、何をか躓き悩むぞ。およそありとある迷執薰染の源なる我等が心の小壺の古徴は、一念清淨の水に迹なく洗ひ去られて、中に燃ゆるは唯沈痛嚴肅なる苦痛の骸のみ。苦痛の骸は畏るべし、しかもそれは往往にして能く百煩惱の束縛を解く。苦痛三昧は屢清涼の三昧なり。

苦痛は必しも恐れ詛ふべきものにあらざ。苦痛は時に吾人を神に詣でしむる試煉の聖殿たり。嗚呼人生の行路に慘痛の涙ありし。かも吾人はこの涙に煉り淨められて、屢赤子天真の心に立ち還るを得。かくの如きは實にこの不可思議なる神の世界の一祕義なり。これ浮泛語にあらず、われはわが病床に於いて曾て屢この祕義を味へり。

陳蔡の野に云

陳蔡の大夫謀りて孔子を野に圍みて糧を絶つ。從者病みて能く起つものなし。孔子誦詩歌して衰へず、弟子の慍色あるを知り、子路を召して「詩云匪兕匪虎率彼曠野、吾道非耶、吾何爲於此」とい

苦痛は人をして至誠ならしむ、眞面目ならしむ、我執我慢を脱せしむ。而して又時に神祕の靈力を直覺する大勇の道士たらしむ。語に曰はく、「苦しい時の神頼み」と、人疾痛慘憺に會して、「まだ曾て天を呼ばずんばならず」と古人も道ひぬ。これむしろ人情の至極なり。而して人情至極の煥發、これ實に神の最も近く在します宮居にあらずや。孔子の極めて實際的氣質なるだに、なほその陳蔡の野に苦むや、天てふ超自然力に我の存在を結びて、以て自ら彊うし自ら勵したり。苦痛に祕義あり、「我が神我が神、何ぞ我を捨て給ふや」の基督の一語、嗚呼世にこれほど深奥無量の苦痛の祕義あるべしや。この一語、只我等が一代の血涙を瀧ぎ盡して味ふべきなり。語る能はず、説く能はず。

二、自大自矜の一念を慎めよ

吾等をして自大自矜の一念を慎ましめよ。吾等にして若し絶對

へること史記孔子世家に出づ。  
我が神云云  
新約全書馬太傳に出づ。

無上の眞理を攫めりとも、吾等は竟にこれ神にあらず、如來にあらず。基督だに曾て自己を神なりとは宣せざりしにあらずや。吾等は竟に神にあらず。吾等は神の子なり、神の大愛に連る一分身なり、一箇識なり。神人合一の刹那の境に於いてだに、吾等は全く神とはならず。ただ一息間なき靈交の自覺に入れるのみ。我は神の温なる懷に抱れながら、依然としてなほ我たり。嗚呼、ここに吾等が永へに居るべき眞地位はあるなり。而して權威と光榮と、亦實にここにあり。吾等をして漫に自悟自覺の一念に思ひあがらしむる勿れ。吾等悟れりといへどもなほ神にあらず。否悟そのことが神よりの恩寵なり。我は、世の絶對の眞理を悟れりと稱する自覺者の態度に、歸依敬虔の一味なきをいと惜しとするものなり。

三、自然

春は歌ひ、夏は働き、秋は考へ、冬は徹す。徹して歌ひ、歌うて而して

働き働きて而して考へ考へて而して徹す。大河の水と流れ梵音の響と續きて一氣貫穿自彊しばらくも息まざるもの、これ「自然てふ大いなる靈魂の呼吸にあらずや。

歌ふや充實す、春潮洋洋たり、働くや充實す、夏雲滂沱たり、考ふるや充實す、秋の野に千里空明の觀念平に、徹するや充實す、冬の空に涅槃實相の姿圓なり。

自然の運行は、歩歩節節悉く充實して、一瞬やがて三世を渦巻き盤ぶ。古池に蛙飛び込む水の音は、聲聲やがて久遠に響き連る轉法輪にあらずや。鳶飛び魚躍り、風吹き水流る、自然の何物かこれ一氣の充實ならざる。充實は即ち誠なり。誠は即ち天地の大悅なり。

信ずるものは人を信じ、人を信ずるものは自然を信ず。かくて我等は熱き涙を頑石の面に濺ぎ、優しき念を荒海の胸に抱くを得るなり。  
(網島梁川 回光錄)

海犬養岡磨  
傳詳ならず。

有馬皇子

孝德天皇の皇子。齊明天皇の四年非望を抱きて死を賜はる。(一三〇〇年—一三〇八年)

橘諸兄

美努王の子。元明天皇以下四朝に歷仕し左大臣正一位

二〇 御民われ

海犬養岡磨

みぢみわれ、さるさる志あり天地の

業ゆるともふあつらうおとへぞ

有馬皇子

家におれも言ふもる飯を草もあらう

しびよあはせ推の泰らもる

橘諸兄

る海童のしら髪もあてにおほはるよ

に至る。世に  
井手左大臣と  
稱す。天平寶  
字元年正月薨  
す。(一三四四  
年—一四一七  
年)  
基檀越妻  
傳詳ならず。

大伴旅人  
安鷹の子。養  
老二年隼人を  
征して功あ  
り。天平二年  
大納言に拜せ  
られ、同三年  
七月薨す。(一  
三二五年—  
三九一年)  
大伴家持  
旅人の子。延

つゝまあつねぞきくもりるり

基檀越妻

神風の伊勢の

涼萩子あせて

くびねまきむ

さまはもた

大伴旅人

紀元年己卯五月庚辰朔甲申辛子吉野  
待伏、  
藤原宮御宇天皇代 高天原廣野天皇元年丁亥午  
一年讓位懿太子孫芳皇天皇  
天皇御製歌  
春過而夏未良之日妙能衣冠有天之香未山  
そらそらよして、  
ももはつねあやれ、  
るも

まにまににもやはななりぬを

大伴家持

まさらそらそら  
まにまににもやはななりぬを

作者未詳

まにまににもやはななりぬを

子等そらそら

山上憶良

瓜合めい子付思はゆ栗合めまき

ありもはごまなすいふも

反歌

白のねいかにむもと

山上憶良  
大寶中遣唐小  
録となり入唐  
す。伯耆守、  
筑前守に歴任  
す。天平五年  
六月卒す。(一  
三二〇年—  
三九三年)

曆中中納言、  
征東大將軍と  
なり蝦夷を討  
つ。延暦四年  
八月薨す。(一  
一四四五年)

しつゝやし

吉野宮にすしめける時もある

柿本人麿

安見くわが天君神たがう神ぶいせすと吉野川にぎつ

柿本人麿  
持統、文武の  
二朝に仕ふ。  
後官に石見に  
卒すといふ。  
吉野川  
吉野山の麓を  
流れ、紀伊に  
入る。



(藏家鳥千) 呂麻人本柿

らぬにき敷きもあかりてよりまら國かそそれきた

なげき青垣山アヲノ神のまつい酒とままは花を  
もら林とば紅葉かきせり遊アヲノ川の神も大出は花をに仕  
へまつると上つアヲノ藤小橋川とそつ下つ藤小橋川と後  
ま山アヲノもよりて仕ふる君が代は花をのとも

反歌

山川もよりそつとつる神たがうこまらに内り  
船出せまらうとも

不盡山と望みてよめる 山部赤人

天地の別が時ゆるみさびてきもさきき暖はたふる  
名もの高嶺と天の系ありさけみれば後さりの新も

山部赤人  
柿本人麿と名  
を齊しうし、  
山柿と稱せら  
る。聖武天皇  
に仕ふ。

かろひ照る月の光をみまゝのまゝにふきほり  
つゞき雪ふりぬる清い水はひびきゆるる音は  
旅ハ

反歌

田子の浦ゆちりぐてみれば真白ほろふ雪はるる  
雪はるるふりける

(萬葉集)

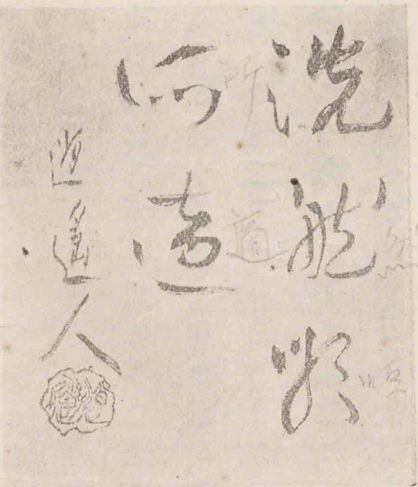
田子の浦  
靜岡縣庵原郡  
吹上の邊の舊  
名。

二二 文學藝術の三作用

およそ人のその趣味性に適合せる文學、もしくは藝術に接する  
や、少くともその當座暫くは心陶然として酔へるが如きを覺ゆべ  
し。これを刹那の忘我と名づく。名畫に見入り、巧なる音樂を聴き、又  
はおもしろき演劇を觀、おもしろき小説を讀める瞬間の感じ即ち

これなり。

或はいまだ曾てかくの如き經驗なしといふ者もあらん。そは生  
來の趣味性の極めて鈍きか、或はその鑑賞上の修養の不足なるが



筆造内坪

爲なるべし。藝術品の高尚に過ぎ  
たるために趣味を感ぜしめざる  
場合、もしくは見馴れ、聞き馴れざ  
るが爲に聯想起らず、随つて深き  
味を解せず、それがため興を覺え  
ざる例はあれども、如何なる藝術  
品に對しても、いまだ曾て何等の  
面白味を感ぜずといふが如きは人性の自然にあらず。又畫にもせ  
よ、音樂にもせよ、詩歌、小説にもせよ、その他の藝術品にもせよ、いま  
だ曾て如何なる種類の人間をも恍惚たらしめしことなしといふ

が如き者あらば、それは名のみの藝術品ならん。苟も文學、藝術と稱する限は少くとも忘我作用だけは具へざるべからず。知識の上流に位する者のいやしみ斥くる類と雖も、社會のある階級の嗜好よりすれば、忘我作用は勿論それ以上の效力をも有する例おほし。

忘我以上の作用を予は遊神と名づく。こは當の藝術を鑑賞するその刹那、その瞬間のみ心恍惚たるに止らず、譬へばかの碁將碁を好める者の、輸贏に我を忘るるが如く、その當座幾十分時、時としてはその後二三時間、長き時はその夜一夜、甚しきは三四日、さながら夢みつつあるが如く惘然たるをいふ。能の後三日とはかくの如き經驗をいへるなり。三月肉の味を知らず」といへる、はたこの種の心境を指せるにはあらずや。蓋し藝術の供する感興の筏に乗りて、われ知らず情の海に浮び出でて、心を別天地に遊ばしむるをいふなり。屑屑營營たる現實界を離れて、一種理想的なる世界にさまよふ

三月肉の云云  
論語に、「子在  
齊聞韶、三  
月不知肉  
味。」

をいふなり。かかる心境に遊ばしむるを文學藝術の微妙なる作用となす。忘我作用に止れるはそのなほ甚だ低級なるを證す。

しかしながら、藝術の眞作用は同化に至りて極る。作用の遊神に止れる間は、譬へばかの安住の地を悟得せざるものと一般、一たびは現實を離れたりと雖も、いつ再び現實に復歸し來らんも知るべからず。所謂遊神は夢裏の心境なり。藝術の微妙なる力に魅せられたる間は、心暫く自我を脱して、或は飄逸なる、或は高遠なる、或は美麗なる別乾坤に遊ぶ。然れどもその夢の穩なる間のみ。一たび穢き、騒しき現實界の聲に喚び起さるるや、美しき夢裏の幻影は忽然として消え、なまなかにその夢の美しかりしが爲に、更に愈現實の醜惡なるを覺ゆることなきにあらず。

思ふに、世間大概の人の經驗せる所ならんが、幼時にありては、如何に奇怪なる夢と雖も少くともこれを夢みつつある間には、夢と



心附くこと稀なるを例とす。然るに漸く成長し自意識の發達するや、日夜に心を勞すること多きがため、夢も亦圓なる能はず。随つてその夢みつつある最中にだに、こは夢なりと心附くこと次第に多し。これその夢の破れやすき所以なり。それと同理によりて、人人の自意識の著く鋭敏になり來れる今日においては、彼の忘我、遊神を最上の作用となし、一種の美しき夢に遊ばしむることを以て能事了れりとなすが如き文學藝術は、最早人心を魅するに足らず。隨つて假令刹那の忘我には用立つとも、長き遊神には用立たざるもの如し。現代の人は、藝術上の幻影か、現の人生か、殆ど辨別する能はざるまでに心酔し且同化せんことを欲す。かの偏に技巧に依り、空想に頼る文學藝術の今は昔時の如く歡迎せられざるは、主としてこの理に本づくなり。

文學藝術の功用のなほ單に遊神に止れる間は、その果して男子

人生は短し云  
英國の諺。

權花一朝の榮

白樂天の詩

に、松樹千

年終是朽、權

花一日自爲

榮。

空しく山丘云

云

李白の江上吟

に、屈平詞賦

懸日月、楚王

臺榭空山丘。

畢生の事業となすに足るべしや否や、頗る疑なき能はず。人生は短し、藝術は壽しと古人はいひたり。然れどもこは果して古今東西、幾何の文學藝術にか適用せらるべき。英雄豪傑の偉業は權花一朝の榮にして、多くの星霜を経たる後には空しく山丘と化し了れども、ひとり文學者、藝術家の大作品は長に日月を懸くといふ。そは果して事實なるべきか。古今東西の名篇傑作にして、今なほ眞に人心を鼓吹し得る程のもの果して多く世に存せりや否や。げにや長く世に玩賞せられて、一時の忘我用遊神用に供せらるる程度のもものは、東西共に決して少からざらんも、單にさばかりの功用にては、果して六尺の男子が心血を濺ぎ、六十年、五十年の壽命を四十年、三十年に縮めて刻苦經營すべきものなるか否か、甚だ疑しといはざるべからず。宗教か、育英か、社會の改善か、政治か、實業か、にたづさはりて、少くとも一國、一代の爲に身を獻ぜん方、或は一層立派なる事業に

人生為藝術

はあらざるか。予はかくはいへど、文學、藝術は必しも毎に教化を目的とせざるべからずといふにはあらず。況やその實用的ならんことをや。畢竟ここには文學、藝術の目的を論ぜんと欲するにあらず。唯その作用において忘我、遊神以上に幾段を進めて、他を同化せしむる力を具へざる間はいまだ眞の藝術的作用となすべからざるをいふのみ。

もしそれ同化作用を有する藝術に接せんか。人はその刹那において自我を忘れ、その當時幾何時か、全く現實を超脱して、さながら別天地に遊行する感あるべし。しかのみならず、その感の漸く薄らぎて自我に復歸せる後と雖も、多少わが好尚、もしくは性癖の一變したるが如き思あるを例とすべし。譬へば催眠術によりて精神療法を行はれたる不良少年などの場合に似たる心的現象を生ず。即ち穢かりし心も自然に美しく、荒荒しかりし心も自然に優しく、め

心廣く云云  
大學に「宮潤  
レ屋、徳潤レ身、  
心廣體胖」

いりたりし心も引き立ち、快活となり、嚴肅となる。一言にて評すれば、當の藝術品の内容と自家の心とが相融會して一となるなり。狹隘なる現實界以外、もしくは以上に、いつしか一の常住界、安住の別天地の成り立てるを意識して、何となく心に餘裕あるを覺ゆ。所謂心廣く、體胖なる情態これなり。これを藝術の同化作用となす。かくの如くにして、時を経る間に、自然の勢としてこの情態を自家以外に推し及さんと希ふ心を生ず。ここに至りては逆に現實界を擧げて、藝術界にて藝術家の經驗すると全然同趣味のものとなさずんば止まざらんとす。ここに至りては藝術家の態度は頗る宗教家の態度に似たるものとなり、強ひて勸化門を開きてなりとも、世を擧げて同一味に化せしめんと欲するに至る。

然れども、所謂同化作用は、或は高く、或は卑く、いづれの方向にも向ふ。善化の用をもなせば悪化の用をもなす。藝術の力はよく風を

移し、俗を易ふ。かの健全ならざる藝術の風俗を壞ることある理もこれを推して考ふれば自ら明白なり。古の賢君、明主は樂の正雅を貴び、淫哇を惡みき。音樂の人心を動すことは最も廣く、かつ深ければならん。その理は移して以てあらゆる藝術のうへに適用するを得べし。(坪内逍遙—作と評論)

### 二二 大正の文學

懸聲は實行の先驅である。百花繚亂たる明治文藝の新氣運を啓いたのは、全く坪内逍遙の小説神髓が、藝術の本質を理論的に闡明し、空前の新觀念を時代に寄與した結果であつた。大正に勃興した新文藝に於いてもやはり同様な逕路を辿つてきてゐる。

明治の末年は自然主義の文藝がその全盛を極めた時代であつた。小杉天外がエミール・ゾラの傾向を學んで新寫實主義を唱へて

小杉天外  
文學者。名は爲藏。秋田縣の人。慶應元年生まる。エミール、ゾラ

Emile Zola  
佛國の小説家。寫實主義の泰斗。(西曆一八四〇年—一九〇二年)

德田秋聲

名は未雄。金澤の人。明治四年生まる。

田山花袋

名は録彌。群馬縣の人。明治四年生まる。

正宗白鳥

名は忠夫。岡山縣の人。明治十二年生まる。

中澤臨川

工學士。長野縣の人。大正九年歿す。(二五八一年)

片上伸

天弦と號す。愛媛縣の人。明治十七年生

から、その客觀的觀照態度は一層深刻となり、更に新自然主義と稱して、善惡美醜を混一にし、作家は只冷靜にその事實を描寫すれば足れりとする信條のもとに、德田秋聲、田山花袋、正宗白鳥、島崎藤村等相競うてその特色ある製作を發表した。然るにその結果は徒に現實暴露に著して、至つて彈力なき光明なき醜惡なる人生相のみ、我等の前に展開するのであつた。

世間は漸く自然主義に不満を感じて、眞の力ある自覺的文藝の出現を望んだ。かくて大正の初年に及び、人間の生命力を高調する現實主義の叫が所在に起つて來た。即ち中澤臨川、片上伸、阿部次郎等の新進批評家は、その陣頭に立つて闘つた。しかも單に文藝上の考察批判にのみとどまらず、直に吾人の生活に食ひ入つて、その根柢に對する改革を説いた。そして社會的方面精神的方面にまで互つて、その高級なる文明批評を試みた。

まる。  
トルストイ  
Tolstoi  
ドストエフス  
キー  
Dostoiéfisky  
タゴール  
Tagoal  
ローラン  
Roland  
グ  
Maeterlink  
ベルグソン  
Bergson

この際特に非常なる壓力を以てわが思想界に侵入してきたのは外國の文學、哲學であつた。露のトルストイ、ドストエフスキー、印度のタゴール、佛のローラン、メーテルリンク、ベルグソン、英のショウ、ラッセル、獨のオイケン等の新思潮が盛に翻譯された。これ等は飽くまでも人間心靈の勝利を基調として、創造的進化の新生活を謳歌する點に於いて、また自然主義の存在を否定するものであつた。

機運は熟した。從來の潤なき自然主義の作風に屢き來つた創作界は、茲に始めて新浪漫主義の高唱を聞くに至つたが、やがてそれは又或は新理想主義といひ、或は人道主義といひ、更に幾多の傾向に分裂しつつ進展した。中にも白樺派の擡頭は實に目ざましいものであつた。彼等は華胄界の新人であつて、元來それ自身の生活境遇が光明に富んでゐるので、かの自然主義に對してあまり共鳴を

ショウ  
Shaw  
ラッセル  
Russel  
オイケン  
Eucken

もち得なかつた。それが外來思想に啓發されて、ここに人道主義を標榜し、眞摯なるその藝術的態度を執るに至つた。この人道愛と個性生命力の光明とを高調した新理想主義は一般の歡迎する所となり、自然主義派は頗る衰運に近づいた。

人道主義派と前後して、現實主義を鼓吹して崛起したのは、純藝術派の諸新人であつた。現實主義における作家の態度は、觀照は科學的精確を尙ぶが、批判と省察とは、飽くまでも嚴肅なる主觀に據らうとするのである。現代の重なる作家は大抵この主義に夤縁してゐると見られる。

更に箇人に就いて見るに、頗る銳利なる理智の刃を以て心理解剖に特殊の手腕を揮つて、人生を諷刺した菊池寛の如きがあり、史的事實の新解釋と洗煉された技巧とを以て、獨自の一境を拓いた芥川龍之介の如きがあり、里見弴、志賀直哉等の精細なる技巧を以

谷崎潤一郎  
東京の人。明治十九年生ま  
る。東京帝國大學國文科中途退學。

實際的運動  
逍遙は明治三十九年文藝協會を、薰は四十二年自由劇場を創む。

小山内薫

東京の人。明治十四年生ま

る。東京帝國大學英文科出身。

中村吉藏

島根縣津和野の人。明治十年生まる。早稲田大學英文科出身。

山本有三

本名重造。栃木縣の人。明治二十年生ま

て自然藝術を創造したのがある。又自然主義派の頭目であつた田山花袋、島崎藤村等が更生の意義を以て、更にその新作を公にして評壇を騒がせたのがある。或は特異の官能的描寫に魅力ある筆を揮ひ、時流の外に超然として久しく自己の堅壘に據つた谷崎潤一郎がある。加ふるに新進の作家雲の如く、創作界は實に生氣潑刺たるものがある。

劇作方面では明治の末年に於ける坪内逍遙、小山内薫等の實際的運動に胚胎して、著しく一般に劇趣味の亢進を來し、且現代の要求を充すに足る好脚本の乏しきが爲、小説家も亦この領域に侵入して、専門家とその衡を争ふやうになつた。中村吉藏、山本有三、倉田百三、長田秀雄等はその尤なる者として數へられ、松居松葉、岡本綺堂は稍低い概念的な民衆趣味の圈内に徘徊する者といはれる。短歌は型の如き小主觀或は客觀的描寫に始終してゐる舊派に

る。東京帝國大學獨文科出身。

倉田百三

廣島縣の人。明治二十四年生ま

る。

長田秀雄  
東京の人。明治十八年生ま

る。

松居松葉  
名は眞芝。仙臺の人。明治三年生まる。

大槻文彦

文學博士。仙臺の人。

高野班山

文學博士。名は辰之。明治九年生まる。

長野縣人。

東京音樂學校教授。

對して、新派と自稱する者も大抵一處に沈滞して更にその新意を認め難い。アララギ派の隆盛を來したのは萬葉集崇拜の餘響に過ぎない。獨客觀的描寫より進んで自然と同化して自然のうちに自己の生命を見出さんとする一派、自己生活を基調とする一派のあ

るのは頗る喜ぶべき傾向で、大正歌壇の一進歩であらう。この種の作家には夙く石川啄木があり、今では北原白秋がある。俳句は依然として進境も變化もない。河東碧梧桐一派の所謂新傾向は、その主張と作句の内容とはともあれ、その表現の方法に至つては容易に諾き難い。只荻原井泉水の未來が未知數であるのみである。

なほ新詩、童話、童謡の流行に就いて、その作家の眞面目なる努力と藝術的なる價值とを顧みねばなるまい。文壇の消息を語る者は創作方面をいふに忙しいので、いつも研究方面は閑却される。落合直文、大槻文彦、上田萬年、芳賀矢一等は國

高木敏雄  
熊小縣の人。  
東京帝國大學  
獨文科出身。  
大正十一年歿  
す。(一、二五八  
二年)  
藤村作  
文學博士。東  
京帝國大學教  
授。福岡縣柳  
河の人。明治  
八年生まる。

語研究に嘗て先驅者の迹を印した。大正に入つて謠物に高野班山傳説に高木敏雄、歌學史に佐佐木信綱、俳句に沼波瓊音の諸家がある。文學史には藤岡作太郎が明治の末期に於いてその國文學史に平安朝篇を遺し、續いて佐佐醒雪、藤井紫影、藤村作は徳川文學にその鋒を競つてゐる。萬葉研究、近松研究、西鶴研究、芭蕉研究、諸家こもごも起つて努力してゐるが、その眞に立派に纏つた發表はこれを後日にまたねばならぬ。(金子元臣)

### 一三三 靜觀と動觀

およそ物の考方には二通あると見られる。一は靜的の觀察であり、一は動的の觀察である。他の言葉でいへば、形式的に物を觀る見方と、内容的に物を觀る見方との相違である。なほ他の言葉でいつたならば、これを資格に於いて觀ることと、これを實際の行使に於

いて觀ることとである。

試に一の土瓶に就いての見方に於いても、これを形式的に靜的に資格に於いて觀るのと、これを内容的に行使に於いて觀るのとは當然趣が相違して來るのみならず、然もその兩面の觀察は同時に成り立ち得るのである。即ち茲に土瓶を置いて靜に觀る。その形の上、その資格の上で考へた時には、この土瓶は水なり湯なりをつぐ道具であるといふ意味に於いて、どの土瓶も悉く平等である。即ち形式的には靜的に平等の資格を有つて居るものであるが、しかしこれを實際に使つて動して見た時には、使ひよいものもあるし、使ひにくいものもあつて、その間に差別が生ずる。即ち動的に内容的にこれを働して見た上では、各種の土瓶の間に大いなる實質的の相違が生ずるのである。かういふ意味に於いて、各人は靜的に、形式的に、資格の上から見れば、萬人悉く平等であるけれども、これを

動的に、内容的に、行使の上から見れば、その間に差別のあるのは當然である。されば平等觀の他面に於いては、かくの如き差別觀を明に生ずることを許さなければならぬ。若し許さなければそれは惡平等に陥るのである。といつて一面に差別觀あることを以て人間としての平等觀、各自の自由意思的活動の機會均等的に行はれることを阻止するのは甚だ不都合である事はいふまでもないのである。結局差別觀と平等觀とは並び立つものであつて、今日の平等思想なるものは、他面に於いては從來の造付なる人爲的な、傳統的な差別とは異なつた眞の各自の實力、能力に相應した差別が發揮せられることを要求するものでなくてはならぬ。

故に選舉權が擴張されて、何人にも機會均等的に國家社會の一員たる資格が認められ、その自由活動の行はれることが許されても、我我は單にそれを以て満足するわけには行かない。各平等に機

會均等的に許されたその資格に従つて、その投票を最も神聖にし、有効にし、眞に效果ある投票能力を發揮しなければならぬのである。これを賣り、これを棄て、これを瀆すのは、選舉權を獲得したる意味を充實するものでないことは明白なる事柄である。故に今日の平等的待遇なるものは、單に人人を機會均等的に取り扱ふといふ意味であつて、その結果に於いては、各人の間に眞の人格的能力に従つての差別あることを許さなければならぬと思ふ。一言にして云へば、平等觀は機會均等主義でなければならぬ。平等觀が頭より尾に至るまで絶えず萬人を均一にすることであるならば、これは惡平等に陥るものである。例へば陸上運動の競技に於いて、競争を公平に取り扱ふといふことは、その出發點に於いて選手を平等の立場に立たしむることである。而して選手を平等の立場に立たしむることは、神聖なるこの能力上の結果が一等、二等として現れん

ことを要求するが爲である。然るに出發點から到着點まで、何時でも平等であるといつたならば、運動競技はとても行はれない。それと同様に、社會活動も頭から尾まで平等であるといふならば、社會活動は行はれない。

故に社會活動が行はれるに就いては、一面に於いては平等であり、他面に於いては差別を生ずるものでなければならぬ。眞に公平に、機會均等的に各人を取り扱つて、その自由意志の存在したる面目を發揮せしめて、其處に各人の實力に相當した神聖な差別が現れるやうに爲さなければならぬ。唯現代に於いて、特に平等的方面の思想が横溢し來つたのは、從來の社會生活が、封建時代より繼承し、乃至は資本制度から承け繼いだ種種なる人爲的な不公平な差別があるが爲に、これを打破せんとして現れて來て居るのである。然しながら何の條件なしに、無考慮に頭から尾まで平等にすると

いふ事であるならば、從來の社會制度を打破すると同時に、自らも亦打破しなければならぬことになると思ふ。

かやうに現代の平等思想と稱するものを批判し來つて、それは人間が自由意志的存在であるといふ根據に立つて、然もその活動を現した結果に於いては、實質上の差別あることを認めなければならぬと考へた時には、所謂平等觀なるものは機會均等主義の意味に於いて理解せられねばならない。機會均等主義とは前にもいふ如く各人をしてその能力を出來得るだけ發揮せしむるやうに、然もその後、に於いて差別があり得るのは當然であるといふ意味に理解しなければならぬことと思ふ。故にこの問題は、權力に關する政治上の問題に於いても、財力に關する産業上の問題に於いても同様の論法を以て解釋し、理解することが出來ると思ふのである。(大島正徳)

大島正徳  
倫理學者。東  
京市學務局  
長。神奈川縣  
の人。



中等國語讀本 新修一版 卷十終

畫 派		寫 生	
畫 派		山 派	四 條
沈南巖	谷文晁	圓山應舉 長澤蘆雪 山口素絢 駒井源琦 皆川淇園	松村月溪 松村景文 森狙仙 森徹山
瀧和亭	跡見花蹊 富岡鐵齋 松林挂月	柴田是真 鈴木百年 久保田米僊 川端玉章 今尾景年 田中賴璋 木島櫻谷	野村文舉 幸野梅嶺 荒木寬畝 森寬齋 竹內栖鳳 山本春舉 橋本關雪 菊池契月 川村曼舟

畫 派

沈南巖 谷文晁 瀧和亭 跡見花蹊 富岡鐵齋 松林挂月

寫 生

山 派 圓山應舉 長澤蘆雪 山口素絢 駒井源琦 皆川淇園

四 條 松村月溪 松村景文 森狙仙 森徹山

野村文舉 幸野梅嶺 荒木寬畝 森寬齋 竹內栖鳳 山本春舉 橋本關雪 菊池契月 川村曼舟



# 日本畫家一覽

中等國語讀本新修一版十卷附錄

(宗)
派
野
英
一
藤本雅邦
川合玉堂
松本楓湖
山内多門
野田九浦

西	洋	畫	派			南	宗	畫	派	世	繪	浮
			岸	條	四							
		司馬江漢 川上冬崖 ワイグマン 高橋由	岸 駒	森 狙仙 森 徹山	松村月溪 松村景文	圓 山應舉	長澤蘆雪 山口素洵 駒井源琦 皆川淇園	池 大雅 與謝燕村 祇園南海 柳里恭 沈南蘋 谷文晁 渡邊華山	本阿彌光悅 尾形光琳 伊藤若冲 酒井抱一 鈴木其一	岩佐勝以 宮川長春 西川祐信 喜多川歌麿 勝川春章 葛飾北齋 歌川豐國 歌川廣重	月岡芳年	右田年英
		川村清雄 松岡壽 淺井忠 五姓田芳柳 小山正太郎 伊人 ホシタ ネツノ	岸 竹堂	森 寬齋	野村文舉 幸野梅嶺 荒木寬畝	柴田是真 鈴木百年 久保田米僊 川端玉章 今尾景年	田能村直入 田崎草雲 野口幽谷 瀧和亭	酒井道一	尾形月耕 稻野年恒 水野年方 月野年方	尾形月耕	武内桂舟 武内清方 上村松園 池田輝方	橋本雅邦 河鍋曉齋 野田九浦
		藤島武二 石橋和訓 三宅克己 南薰造 中村不折 長原止水 和田英作 黒田清輝		川村曼舟 西山翠嶂 荒木十畝 池上秀畝	竹内栖鳳 山本春舉 橋本關雪 菊池契月	結城素明 平福百穂 川端龍子 田中賴璋 木鳥櫻谷	富岡鐵齋 跡見花蹊 小室翠雲 兒玉果亭 野口小巖	松林挂月	跡見花蹊 小室翠雲 兒玉果亭 野口小巖	跡見花蹊 小室翠雲 兒玉果亭 野口小巖	松林挂月	松林挂月



